332-138

滑稽世界見物

44.

はしがき

太陽さまも東郷大將も、お生れなされたときは、僕さ同じく赤チャンであつたに相違ない、と僕は確信して居る。僕のこの確信を不當でないとすれば、現今我國に於て大の四洋通である先生も、一たび赤毛布式の洋行をせられたことがあると、斷言しても敢て不穩當な言葉であるまいと、僕は思つたそこで僕は酒蛙酒蛙とこの世界見物を公にする

花咲生

目　次

出立……1
爺は御見附……39
忠義の腕力……48
僕は日本紳士だ……63
部屋の天上……72
何でも損害……83
口説の虎の巻……90
助倍は好きだらう……113
強いものには弱い……135
日本人が居る……143
西洋の強盗は卑怯……156
市俄古は人情深い……171
日本人？支那人？……189
髭のある坊チャン……201
大統領は大工の頭か……217
何でも日本……227
下から讀む陸前名……239
鼻の低が生寫……253

先祖は加藤清正……263
一建立の五重の塔……289
綺羅は汚い心の外皮……301
はて作平は？……309
宇宙の魔物……317
日本は神國ぢや……323
大蛟橋でドンドン……331
奇妙な日本語……354
人らつちやい……363
怖ろしい怪物……379
都會と人間は同じこと……393
名折れ翁だ……403
君主のお能邪見……413
日本から電報……421
製箔機械……433
バッタ式ではない韓信式……441
一寸と貴方や……449
學位は八々で受ける……454
南京蟲の洋行……460
首府を見ずにカイロ……467

先祖は加藤清正……263
一建立の五重の塔……289
綺羅は汚い心の外皮……301
はて作平は？……309
宇宙の魔物……317
日本は神國ぢや……323
大蛾橋でドンドン……331
奇妙な日本語……354
大らつちやい……363
怖ろしい怪物……379
都會と人間は同じこと……393
名折れ船だ……403
君主のお能邦見……413
日本から電報……421
製龍機械……433
パック式ではない韓信式……441
一寸と貴方や……449
學位は八々で受ける……454
南京蟲の洋行……460
首府を見すにカイロ……467

滑稽世界見物

幸野花咲著

（一）出立の接吻

拙者儀大いに感する所これあり候條近々横濱解纜の巨船天祥丸に乗込み世界一周の途につき可申候に付厚知諸君へ一々告別の御挨拶に登上可致筈に候らへども欧米各國に於て種々大事業の取調を可致嘱托を受け居候に付それ〴〵その準備に多忙を極め寸暇だに無之次第に候まゝ乍略

儀新聞紙上に於て告別申上候

追白　拙者は御昭勅の御旨に從ひ御餞別品の御贈與を堅く御斷申上候次第に候に不關不少御餞別品をたまはり難有厚禮申上候

大日本帝國東京市
會社重役　高井標三

といふ廣告が東京大阪二市にある大新聞紙に掲載せられた。讀者の多數はこの廣告文を讀んで異樣の感を起さないものは少なかつた。如何にも然であらう未曾有の追白は確に類の少ない珍文だ。この廣告文の掲載を申込んだ高井標三といふは商業

した翌月十[illegible]日の遺産を相續して、その金力に倣つて某會社の[illegible]役の肩書を得た當世男で、名はその體を現出するといふ謎の如く高井標三は大の高襟で玉屋洋品店屈指のお得意だとのこと、御本人はそれ位高襟だが、顏面の中央にある鼻は先祖の血統を正しく受けたものと見へ、トントお高くないのだが、それに鼻眼鏡を挾む――といふよりも御陰いたといつたやうにかけ、一本、二本、三本と屈指るほどしか生へて居らない鼻下のチョロ〳〵髭を御丁寧にカスメラクで固め、それをピンと捻上げ「如何だ、僕の髭はガイゼル風に[illegible]西式を加味したのだ」と云つて單獨嬉しがつて居るといふ罪のない性質の男子だ。

襟三は出立の前日だといふので妻のお花と贈與された餞別品を眺め乍ら笑つて嬉しがつて居る。彼の妻のお花といふは似たもの夫婦といふのだらう、これまた大の[illegible]いても男女問

襟論を振廻して得々として居る女だ。

お花「チョイと貴方へ、これを御覽なさいまし、新井さんといふ方は何といふ鈍仰羅なんでせう。貴方が洋行なさる餞別に褞袍をお贈與なさいますとは餘程愚ちやなくつて？

三「お前のお云ひの通り確に愚だ、苟も洋行するものに非文明な褞袍を餞別品にするとはその愚驚くべしだ、さういふ風な人物が少なくないから我國も進歩に遲れ勝ちなのだ、然しお花、十年前までは洋行するに褌を締めて洗濯に困つたといふのだから褞袍の餞別位は別の淺い方だよ。

お花「さうお仰しやればそんなもので御座んすねえ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

天洋丸は東洋汽船會社が米國航路に用ひて居る巨船で、大北汽船會

社のミネソタに比べると噸數は聊か少ないが、内部の粧飾なり隔室の便利な點は彼よりも優つて居る新造船だ。その汽船は本日午後三時に横濱を出帆し桑港に向ふといふので、乘客は午後一時頃から汽船に乘込みに來る、それに連れて、多數の見送人が從つて來るので船内は勿論甲板には夥々伍々紋附羽織やフロックコートが蹤々して居る。

高井襟三は例の如く高襟がつて一歐米の紳士は旅行するにも男子一給仕を從へて居るものだ」といふので、亡父の代から忠實に本公、て居る作平と呼ぶ五十何歳といふお爺を給仕として召連れ洋行するとになつた。といふは、表面の理由で實際はお花が襟三に西洋にいて浮氣をせしめないやうに作平をお目附にしたのだ。襟三は五お爺の作平を連れて行くといふとは紳士の體面に關すると聊少ならず閉口して居るのだが、男女同襟論を正面から振廻すお花の命令だ、

から不平ながらそれに服從つた、で襟三の友人は襟三を『嘲孝行』と内々笑はないで居らなかつた。

襟三は作平と俱にお花だの見送人に送られて天洋丸へ乘込むと、間もなく烟筒から黑い〳〵煤烟がパッ〳〵と吐て、巨大の怪物の叫聲かのやうに汽笛が鳴り、ガン〳〵と銅鑼の音が聞へて出帆を報じたので、襟三とお花は甲板で告別の接吻をした。齒痕が戀の烙印なれば接吻は神聖の戀愛の公正證書のやうなものだといつたやうな風で、乘人の中で恥かしとも思はないで……。

それはその筈襟三とお花は接吻は文明國民のなしつゝあるものと信じて居るのだもの。

やがて見送人は蜘蛛の子を散らすやうに解纜に乘つてそれ〴〵歸ると、汽船は動出して秒々分々横濱を朦々と離らげた。

襟三、作平、横濱は見へなくなつたよ。

作平、さやうで御座ります。

襟三、のう作平、お前が若し新教育を受けた人物であるなれば、今回の洋行で大に得る點があるだらうに、殘念なとはお前は『山高きが故に貴からず』式の教育しか、受けて居らないのだからね然し落膽して自暴自棄するに及ばない、僕が洋行中に出來得るだけお前を指導してやるからね、心配しないが可い。

作平、へイ、何も有難う御座ります。

襟三は作平に『有難う御座ります』と云はれ得意になり。

襟三、作平、アノ煤烟を見なさい、進歩の原理を暗示して居るだらう。

作平は襟三の言葉の意味が充分に了解ないので、へイ〳〵の一點張

襟三、進歩といふものは向上の意だ、平易いへば下から上へ向ふ譯アノ煤烟はそれで下から上へ向つて上り行きつゝあるだらう、だから煤烟は向上で進歩の原理を暗示して居るといふのだ。

作平「成程、さういふ譯で御座りますかな、それで汽船だの汽車だのは煤烟をプッ〳〵と吐出しますから、文明の利器だとかいふので御座りますな。

（二）化物は自働車

天洋丸は横濱を出帆して東へ〳〵と航路を取つて進行し、十日後布哇群島に聳立て居る噴火山を見るやうになつた。そこで乘客は兩眼鋭だの望遠鋭だのを出して陸地を眺め「今夜はホノルヽへ上陸出來得るよ」と云つて滿面に喜色を滿へないものは稀であつた。横三も矢張ホノルヽへ上陸なし得ることを喜ぶ內の一人であつた。

横三「作平、この兩眼鋭で遠に見へる噴火山を見なさい。

横三は作平に佛國製の兩眼鋭を貸與へ。

横三「そら噴火山が見へるだらう、アノ噴火山はキラウアといつて有名なものだから、世界地圖に明かに記入してあるのだ、如何だ作平、ポッ〳〵と烟を吐いて居るだらう。

作平は兩眼鋭を兩眼につけ。

作平「旦那さまのお仰しやいます通り烟が見へますで御座ります、だがポッ〳〵といふ音響は聞へませんで御座りまする。

横三「そりや聞へないだらう、聞へないが正當だ、僕がポッ〳〵と云つたのは形容に用ひた詞だもの。

作平「ポッ〳〵といふのは形容たらいふ物品で御座りまするか、この作平にはその形容とかいふものは見へも致しませんけりや、聞へも致しませんで御座りまする。

横三「何に？形容が見へないつて、これは慥かざらんと欲するもけんやだ、形容なるものが見へないと眞面目にいふ老人

明の教育を受けた紳士たる僕の隨行員たる栄職を命じた、僕の妻君は賢婦であるだらうか？この點だけは確に失策だね。

と襟三は獨語。作平は襟三が獨語し意味を解せざれば平氣なもの。

作平「旦那さま、畑が見へまするが、アノ畑も矢張下から上へ出て居りまするで御座りまするが感心なもので御座りまする。

襟三「作平、そんなに畑が上るのが感心かね。

作平「感心で御座りまするとも、作平爺でもこれを感心せずに居られませうで御座りませうか、ヅント感心致しまして御座りまする。

作平は頭を傾け感に堪へざらんやうである。襟三は作平の感に打たれたる樣子に少々合點が行かぬといふ風にて。

襟三「如何も確に感心したやうだね。

作平「確に感心致しました。旦那さま御覽なされませ、貴方さまがお仰しやいました通り文明國に御座りまするものは山さへ畑を上へ〳〵と吐いて向上とかいふことを教へて居りまするで御座りまするから、この作平爺も感心したので御座りまする。

襟三「これは愈々感いた、文明國の噴火山だから下から畑を吐出して居る——とはナカ〳〵振つた言葉だよ、のう作平、お前の論鋒を以つて云へば野蠻國にある噴火山は上から下へ畑を吐出すことになる譯だね、アハ、、、、。

作平「旦那さまには何が面白いので御座りまする。

襟三「お前の論鋒が奇拔だから面白く感心したのだ。

作平「さうで御座りまするか。

作平は襟三に褒められたものと思ふて得意の樣、さりとては那のない老爺さんである。

陸地が眼に映じたので乘客は始々と騷いで居る内に、天洋丸はホノルル港へ入港して錨を下した。それと見るより乘客は小學校の生徒

が、運動會に行くかの如くわれ一に上陸をする。禁三も遅れじと作平を連れ上陸してホノル、市内を見物せんと、日本人が御者をして居る馬車に乗らうとした。

禁三「馬丁、ホノル、市内を見物するのだから適當な場所へ馬車を走らして呉れ。」

御者は禁三に馬丁といはれたので少々癪にさへたと見へ。

御者「モシ、馬丁ぢやと云はしやつたが、乃公は馬丁ぢや御座せんよ。ドライヴアー(御者)といふんで御座すよ。」

禁三「馬丁ではないドライヴアーだとこれは頗る珍言だ。山中では御座らぬ山中で御座るといふのと同筆法だ、アハ、、、。」

御者は禁三が同筆法と云ひしを誤解し、

御者「何ぢや？馬鹿鋒ぢやと、モシ乘客さん、お前さま、當所を何所ぢやと思ふて居らつしやる？、當所は米國の布哇で御座すよ、日本ぢやありまへんよ、見たところぢやお前さんは青二才ぢや御座せんか、青二才なら青二才らしう生意氣なことを云ふもんぢや御座せん。」

御者の氣焔はナカ〳〵高い。流石高禁がつて居る禁三もこの御者には聊か閉口の體。

禁三「僕が青二才とは恐れ入つたね、如何にもお前の云つた如く僕は布哇通でない、布哇に於いては確に君が云つた如く青二才だが歐米に關しては我國有數の智識だからね、お前なんかは僕の下に伏して指導を乞ふが可い、若しもお前が二十世紀の日本國民として世界的舞臺に立ちたいと思ふやうな希望があるなれば、

積極電氣と消極電氣が相擦れば或種の作用を起し、御者は鞭をグッ

御者「何んだ？お前――世界的――オイ、お前さんは何所の人か知らないが大きなことを云ひなさるぢや御座せんか、世界的だと云ひなさるが布哇の作法さへ知んねえお前さんが、世界的なんて大きなことを云へる譯のものぢや御座せんよ。

布哇に居る日本人は華族も新平も同等で御座す、そんだに楽さうな法螺を吹きやがつて、オイ青二才布哇に居る日本人はそんなへなとに吃驚はしやせんぞ、新來の青二才奴。

御者は横三の頭上に馬鞭を浴せかけて、ブイと立つて馬車に乘り何所ともなく去つた。横三は御者の怪氣炮の烟に捲かれたのか、何事も云はないで去り行く御者の後姿を眺めて居つたが、二度が見へなくなつたのに心つき。

横三「作平、驚いたいらう、如何だ彼の言語動作は……。」

と云つて慨歎に堪へざらんかのやうに言葉の調子を下げ。

横三「……、彼も我同胞の一人と思ふと僕は日本國のため悲むよ、彼等とても我國に居つて土堤の二郎五郎左衛門や豚右衛門を相手にして居つたなれば、質朴愛すべき好農民であるだらうに、半半文の布哇なんかへ移住ため、あんな風の人物になつたのだよ。のう作平、彼等は人間――殊に日本人になつて居らない、一種の半人半化の動物だよ、だが僕は決して彼を惡まない僕に向つて毒舌を弄したけれど。

文明な國民は彼等の如き半人半化の動物が毒舌を弄したからといつて、決して惡むものでない否な惡まざるのみならず、寧彼等が半人半化である點を憐んで同情せなければならない、そこに文明國民の雅量があるのだ。

と横三は作平に語る。作平は横三の意味が了解ないが、何でもヘイ〳〵と云つて居れば可いと唯一へイ〳〵。横三は意々得意となり

禁三「ところで文明の國民たる僕が何故雅丑を抱いて居らなければならぬかといふと、それは僕が學士といふ尊號を受けたほど高尚な教育を受けたものであるからだ。若し彼等が僕に放つた毒罵を無學の證に放つたなれば野蠻な爭鬪が起るに決定て居る。作平、高尚な教育を受けたものは怒るべきをも怒らないで忍耐をしなければならない、それだけでも無學の徒より苦痛が多い譯であり、且つ心配が多い――といふのは國家といふとに直ぐ慾を運ぶからだ、これを思ふと古人は名言を遺したものだ。

作平は禁三の言葉を聞いて、何か相當な挨拶をしなければならないと思ひ。

作平「さやうで御座りまするか、御心配なことで御座りますなら、その古人の名言てふとも矢張文明の――その――何とかで御座りまするで御座りまするか。

禁三「マ、そんなことにして置くとして、その名言といふは……。

禁三は眞面目になり。

禁三「想老泉曰く文字を知るは憂を知るの本なりだ。

作平「へー。

禁三「了解つたか。

作平「へー、了解ません。

禁三「さうか、さうだらう、それ故お前は僕より心配が少ないのだ。

作平「旦那さま、それはそれとして、こんな所で無かしいことを云つて御座らつしやらないで、ホノルルの市中を早う見物させて下されませ。

禁三「諾々、それではブラ〳〵出かけやう。

禁三は作平を連れ歩み出した、然し禁三は海外の土地を踏んだは腑帯を切つて、今日がはじめだからホノルルの市中の案内は勿論知らな

いのだけれど、原來西洋通を以つて自任して居るのだから、平常から作平に、歐米各國の都市を丸呑みにして居るやうに、大言して居つたのだもの、今更らホノルヽ、市内の勝手が了解ないとは云へず、エヽ、歩いて居れば何所かへ行くだらうと、細き洋杖を片手に身を反らし、例の鼻眼鏡をかけサッサと歩み出す、その歩行の早さ老年の作平は兎角遅れ勝ちだ。

作平『旦那さま、さう無闇に早う歩いて下さつては、作平は堪りませんぢや。

義三『早やいとお前は云ふが、これ位の歩行は西洋で普通だ、野蠻國は『時はこれ金』といふ經濟的の金言を知らないから、牛か豚のやうにノソリ〳〵ノロリ〳〵と歩いて居るが、西洋は決してそんなことはないのだ、早い證據が僕とお前だ、僕は文明の教育を受けた國民だから歩行が早いが、お前は『山高きが故に貴からず』とか『商賈往來、凡そ商賈』と云つたやうな教育を受けた人間だから歩行が遅いぢやないか。

作平『旦那さま、歩行が遅いからと申して野蠻と限るものでは御座りません、日本が開けません蒼幕の時代でも飛脚は脚早で御座りました。

義三『そりや飛脚は職業だもの早く歩いたいらうが、火の用慎〳〵カチ〳〵、ドン〳〵〳〵と深夜歩いた夜廻りは如何だつた、歩行が遅かつたいらう。

作平『それは遅う御座いまして御座りまする。

義三『さうだらう、だから、さういふものを夜番といつたらう、蓋し野燈は夜番の轉化なりだ。

と云つて義三は『ナハヽヽヽ』と自分と自分の駄洒落に一笑して面白い』と云つた。作平はそれに反對でトント面白く思はない

いふのはホノルヽを見物させてやるといふ様三の言葉であつたからホノルヽといへば東京の銀座通だの大阪の心斎橋通のやうな繁華な土地で、大階高楼が軒を列べて居るのだと信じて居つたのだ、それに即今歩いて居る所は電氣燈瓦斯燈の火の光りは悉か、街燈の一個だにない淋しい個所で、眼に入るものは雲間に輝く星と砂糖黍の畑が朦朧たるばかりで、縱から見ても横から見ても甘蔗畑の田舍路である。

作平「旦那さま、こんな真暗な土地がホノルヽで御座りますか。

と作平は様三に尋ねた、それに心附て様三は附近を見ると、南無三寶！、ホノルヽの市街は二哩ほど距つた、左手の方にあるらしく思はれ市街に點じつゝある電氣燈や瓦斯燈の光輝は高く輝いて「こゝがホノルヽ、市街で御座い」と云はんばかりに数人を居る。様三は手前味噌を揑ね調子に乗つて多辯で居つたゝめ、ツイ心附かないで居つ

たのと、土地不案内であつたとのため、こんな田舍路へ踏込んだのだと、作平に白狀するのは殘念だから何とか巧く作平を誤魔化さうと、鈍んだ所へ負け吝みを出し。

様三「さうだよ、こゝは勿論ホノルヽ、市街ではない、市街を去る約二哩の田舍だ確に田舍だよ。

と故意と落附拂つた風を示す。

作平「田舍で御座りませう、私も田舍だと思ひまして御座りまする田舍は都會と違ひまして田舍の臭氣が致しまするで御座りまする。

様三「田舍には田舍の臭氣がすると？、作平、お前にはその臭氣が解かね。

作平「了解ますとも、この作平の鼻は大したもので御座りまして、都會や田舍は悉かなと私がこの鼻をピコ〳〵と動かしましたなら何な香臭でもこの鼻へクス〳〵〳〵と入つてまゐりますから、

私は直ぐ感じて何は何ーと感じまするで御座りまする。

と作平は自慢をした。

藤三『さうか、それは大した鼻だな。

作平『大した鼻で御座りまするとも、私、自身にいふと可笑しう御座りまするが、これ位の鼻は他所に御座りますまい。

藤三『さうか、さうだらう、然し僕は鼻の自慢を聞いたのは今夜がはじめてだが、作平お前は鼻の自慢をするから象のやうなものだの。

作平『それはさやうで御座りまするが、私は象のやうに物事を鼻にはかけませぬで御座りまする、へ、へ、へ、。

と作平に笑ふ、こゝ作平大出來と云ひたいやうである。

作平『それはそれとして、旦那さまは何故市街を見物なさらないでこんな田舍路をお歩きなさるので御座りまする。

藤三『それか……、それはな……。

作平『ハイそれは？。

藤三『それは他でもない、僕は猶船暈の氣味があるものだから、故意と田舍路へ出て新鮮な空氣を吸入ふと思ふのだ、新鮮な空氣ほど人體に可いものはないだから、近來の名醫は空氣療養と云つて、空氣に依つて病氣を全快せしめるやうになつた、學術殊に醫學が進歩すると藥劑の必要なく、新鮮の空氣で患者を全治せしめるやうになるものだ。

作平『それはさうで御座りませうとも、天理教なぞでも進歩した新たしい宗教で御座りまするから、病人に藥劑を與ないで御神水で病氣を全治まする、それを思ふと天理教は有難いもので御座りまする。

と云つて作平は眞面目に『惡しきを拂ふて助けたまへ天理王の尊』

といふ。禁三は作平の馬鹿々々しさに呆れて居ると、作平は両手を動かしてお祈禱の真似をする、禁三はそれを見て。

禁三「アハヽヽハヽヽ、作平、そんな馬鹿は真似をするな。

作平「馬鹿な真似？、これは旦那さまのお言葉とも存じません、断然な空氣で病人を全治すよりも、有難い天理王さまをお頼み申しまするに馬鹿なとは御座りませんで御座りまする、

禁三「お前はそんなにお云ひたが、天理教は確に迷信教でその信徒は愚夫愚婦ばかりだといふとは、天下の輿論だよ、だからそんなものを信仰しなさんな、苟も二十世紀の世界的紳士たる高井禁三の従者たるものが、恐しきを拂ふて助けたまへ天理王の尊なぞと愚にもつかないとを云つて、ステヽコ踊のやうな手振をすると云はれては、僕は勿論のと僕の親戚、先輩、大きく云へば我国の国辱になるよ。

作平「何にが、そんなへなとが御座りませうもので御座りませうか、天理王さまは有難いもので御座りまするで御座りまする、その證據には皇陛下さへ御信仰遊ばしまするで御座りまする、天皇陛下は神道を御信仰遊ばしまするで御座りまする其神道の随一と申しまするで御座りまする、

御祓とか黒住とか何とか秘々な名稱は御座りまするが、要之「分けのぼる麓のみちは多けれと何れ高根の月を見るらん」御座りまするで御座りまする。

と云つて作平は頗る得意の慢。

禁三「アーメン。

と禁三は作平を愚弄する、作平は天理教を愚弄せられたと思ひ。

作平「旦那さま、お前さまは何たるとをお仰しやいまするので御座りまする、天輪さまに向ふてそのやうなとをお仰しやいましては

邪魔のほどが怖しう御座りまするで御座りまする。

と云つて柏手を打ち。

作平「天輪さま〳〵何卒旦那さまをお免し下されますやうに、忠義な作平がお願ひ申しまするで御座りまする。

作平は眞面目に祈つた上、氣を一轉て。

作平「旦那さま、こんなに淋しいところに何時まで居りましても仕方が御座りませんで御座りますから、早くホノルルの市街へお供致しませうで御座りませうで御座りまする。

襟三「それもさうだな、僕も新鮮な空氣を吸つたので頭腦の加減が好くなつたから、それではホノルヽの市内へ行くことにしよう。

と襟三は何所までも負け吝み、作平を連れてホノルヽの市街に向つたが土地不案内のことであるから襟三は内心ビク〳〵ものでなにか都合好く市街に出られゝば可いが、杖とも柱とも見るものはホノルヽ市

街に高く輝いて居る電氣燈の光のみである、ところがその電氣燈さへ道路の高低と繁茂せる砂糖黍のため、時々隠れて見へなくなるので心細さと云つたらお氣の毒のやうである、樹加へて二哩も歩行ばホノルヽへ著くと思つて居つたに、彼我三哩も歩いたと思はれるにナカ〳〵市街に著きさうにないので、襟三は消氣に消氣た。

襟三「作平、僕は非常に腦髓の加減が惡くなり今にも腦充血になつて死にさうで、こゝから一歩も行けない、アヽ苦しい〳〵。

襟三は道路にペタリと腰を下して今にも絶息しさうに見へた。作平はその樣子を見て吃驚し。

作平「旦那さま、旦那さま確乎して下さい、如何遊ばしましたので御座りまするで御座りまする、お前さまがこんな土地で死んで下さりましては、作平は奥さまに申譯が御座りませんで御座りまする氣を確にお持ち下さりませ。

と作平は一生懸命にいふ。樣三は苦しさうに眼を開き聲細く。

樣三「さ……さ……作……平……苦しい〳〵。

作平は樣三の聲に腹内を削らるゝやうに感じ。

作平「旦那さま、作平が居ります間は旦那さま安心して御座らつしやい。

樣三「さ……作……平、こんなに苦しうては堪らないから馬車を呼んで來て早く僕を乘せて呉れ。

作平「へイ〳〵承知致しまして御座りまするで御座りまする……、と云つたところで、こんな田舍路には馬車とてもあるまい、さて困つたとだ。オヽさうだこんときには天輪さまをお願ひ申す外はあるまい。

作平は地上に跪座て、

作平「南無……、天輪王さま〳〵、私主人が腦充血といふ怖しい病氣にかゝりまして、今にもお亡くなりなさらうと致して居られまするで御座りまするで御座りますれは、何卒助け下さりまするやう願ひまするで御座りまする、南無天輪王の尊、助けたまへ南無天輪王の尊……。

作平は一心不亂に天輪王を祈る、樣三は作平の祈願の効顯なく、愈〻苦しさうな聲を出し。

樣三「さ……さ……作……へ……平、そんな祈願をしないで、一……一時間、十……分、一……分……一秒も早……く、パ……馬……車を呼んで來て呉れ。

作平「へーイ……、と云つたところで往來さへ稀なこの田舍路、何方へ行けば馬車があらうやら……。

作平は思案に首を傾け。

作平「オヽそうだ、馬車を呼ぶにも何をするにも土地不案内のとだで

矢張天輪王さまをお願ひ申す外はあるまい。南無天輪王の尊、何卒馬車を早く送らせたまへ南無天輪王の尊……。

と作平は熱心に祈る、それにつれ襟三は益々苦しさうな聲を立て。

襟三『さ……さ……作……そ……ん……なとを云つて居らないで、早う馬車をさ……が……してお呉れ……ウーン〳〵。

と苦しさうな呻聲を出す、作平はその叫聲に驚いて。

作平『旦那さま、それでは馬車を呼んでまゐりまするで御座りまする で御座りますするから、お苦しう御座りませうが暫時御辛抱下されませ。

と云つて作平は何所ともなく行つた。襟三は作平の姿が見へなくなると今まで苦んで居つたのは嘘のやうに、元氣好く立ちあがり。

襟三『アー苦しかつた、病氣でないに病人らしい動作をするのは苦しいものだつた、こんな演劇をするやうになつたも、僕が餘り西

洋通がつて土地不案内であるにも關はらず、ホノルヽの市街を丸呑みにしたやうなことを、作平に云つて烟に捲いてやつたものだから、作平に對しても案内若を備ふとが出來なくなつて、無闇矢鱈に方角も考へず脚に任して歩いたものだから、こんな飛んでもない田舍へ迷ひ込んだのだ、と云つて迷ひ込んだから如何しようと猶更作平爺に相談は出來ず、苦心慘憺の末思ひついた偽病氣で、作平を烟に捲いて馬車を呼びにやつたのだが、こんな妙計は楠公も三舍を避けるだらう。

こんなとを云つて居る内に作平は馬車を見つけ逃れて來るだらうから、マア一服煙草を吸うか……。

襟三はパケットより紙捲煙草を取出し火を點し一二服プカ〳〵と吹かせしが。

襟三『まてよ、熟考て見ると煙草を吸ふて居るときでないぞ、これ

日本なれば作平は馬車なり傳なりを呼んで來るだらうが、こは布哇だから作平翁には馬車の馬の字……、でない言葉を話すことが出來ないのだ、さうだとすれば作平は臣同樣のものだから、馬車を呼ぶところのことでなく、作平翁が自分の身體一つの始末もつかない譯だ、さア飛んでもないことをしたぞ、大變なことを仕出かしたぞ、こりや如何したら可いだらう。

と襟三は急に心を痛め出した。

襟三熟考て見ると飛んだことをしたものだ、こんなことになると知つたら、僞病氣なぞを出すではなかつた、餘りな遁を振廻すではなかつた、駄法螺を吹き過ぎるのではなかつたに、後悔前に立たずとは好く云つたとだ、今更ながら古人の言は感服の外はないて。

襟三は最初の氣勢何所へやら、消へて飛んだことに感心した。

襟三作平といふ五十翁の曉を一人歩きをさせたのだから、馬車はさて置て無事に歸つて來るとか出來るだらうか、それが頗る疑問だて、所ういふ場合になると人間より狗犬の方が餘程利口に出來て居るな、何所へ行くにも要所々々へ放尿して置いて、その臭氣を嗅いで歸へることが出來るのだもの、人間には生中禮儀とか作法とかいつて憚とかいふものがあるため、そんな眞似が出來ないだけ不便なものだ、考へて見ると人間は自分勝手に進歩して、その進歩の規則に縛られて、四苦八苦の煩悶をするのだ、と思ふと人間は馬鹿な動物だて。

襟三は獨語りつゝ作平の身を心配して居ると、遥の方から巨獸か怪物かの兩眼でゝもあるかと思はれる、二個の怪光が疾風の如く襟三に向つて進んで來た。

襟三ヤーッ、彼は何だらう、我國には巨獸なぞは居らないが熱帶地

方へ行くと、我々が實見しない怪獸があるさうだ、彼もさういふものかも知れない、オヤ〳〵僕の方に向つて來るぞ、コリヤ間違々々して居る場合でない、彼のやうな怪獸に捕促られちや大變だ、早く何所へか身體を隱くさなけりやならない。

禁三は怪物の眼に入らないやうと、狼狽しながら砂糖黍の間に身體を潜め、怪物の樣子如何にと氣息を殺して居ると、怪しい二個の光は怪しい音を立てゝ疾風の如き速度で、禁三が潜んで居る砂糖黍の前の道路を走つた。

禁三『オヤ〳〵何のとだ、怖るべき怪物かと思つたら自働車だつた、自働車の死斯燈を怪物の眼と間違へたなんかは滑稽千萬なとだ彼の自働車は速力が早かつたから確と見へなかつたが、何でも乘つて居つた客は日本人らしかつたぞ、日本人だとすれば作平が何人かに通譯して貰つて、僕を乘せるため自働車を備ふて來

たのかも知れないぞ、若しそれだつたら僕が居らなかつたから心配をして居るかも知れないて。

禁三はさう推定て一聲かけたら可かつたにと後悔して、走せ去りし自働車を汽車に乘り遲れたものが、發車した汽車を見送るやうに眺めて居ると自働車は一哩ばかり進んで禁三の方へ徐々と引返して來て禁三に近づいて來た。

禁三『近づいて來たぞ、こんどは僕の方から聲をかけてやらう、萬一作平でないにしたところで、ペコ〳〵頭を下げて依賴ばホノルヽの市内まで乘せて呉れないとはないだらうよ。

禁三はこの自働車こそ盲目の浮木と聲高く。

禁三『オーイ自働車やイ〳〵。

と叫んだ、その聲が通じたものか自働車はヤヽ速力を早めて禁三に近づいて來た、それに力づいたと見禁三は『占めた』と喜んで居る

と、自働車の上から。

作平『旦那さまで御座りまするで御座りますか？。

と聲をかけた、その主人は外ならぬ作平翁である。そこで襟三は愈〳〵勇んで。

襟三『作平か、爺か、好く歸つて來て呉れたね、僕はお前が去つた後如何位心配したか知れなかつた、マア〳〵無事で茅出度とだ。

襟三は元氣旺盛といつたやうな風、作平はそれを見て喜び。

作平『旦那さま、お前さまはナカ〳〵元氣で御座らつしやいまするなと尋ねられて襟三は胸にギックリ。

私はお前さまが如何だらうかと心配致しまして御座りまするがお元氣さまを見て安心致しまして御座りまする、然し御病氣は如何で御座りまするで御座ります

襟三『病氣か、僕の病氣かい、その病氣は……ニ……セ……でない

逃げて仕舞つた。

作平『さやうで御座りました、それは何よりも茅出度とで御座りまするで御座りまする。

と作平は云つて。

作平『渡る世界に鬼はなしと申しまするが、如何にもその俗諺の通りで御座りまして、私は如何しても馬車を見つけなければなりませんと存じましたが、何を申しましても私は旦那さまが御承知で御座らつしやいまする、ワン、ツー、スリー、エー、ビー、シーといふ言語を存じませんので御座りまするで『馬車々々、旦那さま病氣、馬車々々』と連呼ながら二里ばかり走りますと少々暖やかなところへ出ました。

襟三『成程、それがホノルゝの市街だ。

作平『さやうで御座りませう、それから私は心強うなりましたで『馬

車々々』と氣息が切れますほど大聲で申しました、さう致してますと洋服を着た大きな男子が私の腕をグット掴りまして、何だか無かしいことをペラ〳〵と申しまして御座りまする、スルト往來の人が一人立ち二人立ち致しまして果ては多數の見物人が集りましたが、その内に日本人が居られました。

禮三『さうだらう、布哇十五萬の住民中八萬七千は日本人だもの過半數だ。

作平『その日本人の内に領事館の御方が御座らつしやいまして、私と巨大男子の側へお越し下されまして『如何したのだ？』とお尋ね下さいましたで、私は私の旦那さまが斯々だと申しました。それをお聞きなさいまして領事館の御方さまは『それは氣の毒だ』とお仰しやいまして、巨大男子に何だかペラ〳〵とお仰しやつて、私の腕を離さしこの自働車をお貸し下さいましたので、

御座ります。

禮三『それは大層御厄介になつたね。

と云つて禮三は自働車の運轉手に向ひ。

禮三『役中であるのに大變お氣の毒だね。

運轉『何に氣の毒も何もあるものぢやありません、私は乘客さんをお乘せ申すが役で御座いますもの御遠慮にや及びません、さ旦那お乘り下さいまし。

運轉手の勸めに禮三は自働車に乘ると、自働車は疾風の如くホノルルの、市街に向つて土砂を蹴立てた。

（三）爺は御見附

海上旅行は快心の一つであるが、然し方法が拙いとこれほ

感ずるものは少ない、耳に入るものは風浪と機關運轉の音。眼に映ずるものは茫々渺々たる空と水で、船客の多數は徒然に日長を感ずるものである。勿論船内には讀書室だの喫烟室――弄花室だのが設けてあり、遊戯の具としては甲板打球、輪投げ、ピングポング、テニス、音樂としてはピヤノ等の設備はあるが、それ等は暑中に於る一杯の清水のやうなもので、咽喉を過ぐれば直ぐ暑氣を感ずると同じき効力しかない。だから船客の多數は一日も早く上陸なし得るを喜ぶものである。陸地に居ると陸地の有難さが了解ないものだが長い航海をして見ると陸地の有難さが了解るものだ。高井襟三は航海中普通のものより多く無聊を感じた、といふものは横濱を解纜した翌朝襟三は朝飯前甲板へ出て海風に氣を晴した後、自分の船室に入らうとして誤つて西洋婦人の船室へ飛込んで、飛んだ恥をかいたものだから、流石の襟三も面目ないと見へ病氣だと云つて、自分

の船室より除り戸外へ出なかつた、だから普通のものよりも上陸を樂んで居つたから、着港すると直ぐホノルヽへ上陸して愉快な時間を過したいと思つて上陸したのだが、それも方角を間違へたのと土地不案内とのため、田舍へ迷ひ込んで消氣込んだが、漸々作平の力で自働車に乘りホノルヽの市内へ着いた。さうなると襟三は矢張例の襟三で怪し氣な西洋語を振廻すことになつた。

襟三「運轉手、お前は我々を何所へ連れ行く積りだ？。自働車の運轉手は自働車が市内へ入つてより、徐々と進行させながら。

運轉「波止場へお送り申さうと思つて居りますのです。

襟三「波止場……、波止場へ行くのでないよ、何所か見物するため上陸したのだから、そのつもりで何所かを見物させて下さい。

先づホノルヽの名所としては舊王城……、だね、抑も史籍を繙

けば布哇國たるや……。

と襟三は例の通を振廻す、運轉手は襟三の言葉を叫き。

運轉「旦那、貴方は舊王城とお仰しやいますが、王城なんて城郭でも何でもありは致しません、名ばかり王城で眞實に不價値ものですよ。

襟三「さうだらう建築といふ上から論じたなれば、極めて價値のないものであらう、それは爾かあるべきとだ、然しそれは歴史的頭腦のないものがいふとで、僕の如き歴史的殊に政治沿革史といふ立脚點から見るものは、建築上價値のないものも多大の價値ありと認めるものだ、一例を云へば淺草の觀世音だよ、彼は彫刻といふ上からいへば漸く一寸八分に過ぎない些々たるものであるが、史眼より見ればナカ〳〵價値あるものだ。

と云つて襟三は得意氣に髭を捻る。

運轉「淺草の觀音さまが一寸八分、成程、そこで山椒小僧……辛いといふやうな譯で御座いますね。

襟三「淺草の觀世音と山椒を比較するとは滑かざらんと欲すも得べからんやだ。

運轉「だつて淺草公園には名物の唐辛子屋があるぢやありませんか。

作平「さうぢや〳〵、淺草の唐辛子と藥研堀の唐辛子は東京名物の一つぢやて。

襟三「これは慨いた、滑稽も極度を過ぐれば涙となると叫いて居つたが、如何にも名言だ。

お前達の滑稽は無學を示して居る、それを思ふと僕は同情の涙を禁じ得ん。

と襟三は慨歎に堪へぬといつたやうな風で。

襟三「然しお前達の罪でない、お前達の父母の

I love you, you love me.

罪……。

と云つて一寸考へ。

藤三「……でもない、社會の罪である社會は多くの人に罪を作らしめる、それは社會組織の不備が然らしむる所で、僕等は無にその點に就いて多大の注意を拂つて居るのだ、これも僕は社會の一員としての義務と確信して居るからだ、今回歐米各國に於て種々の大事業を取調する囑托を受け、心快く承諾したのも社會に對する僕の忠實なる精神からだ。

襟三は滔々と述べて作平と運轉手をジロリと眺めた、それは二人に暗に感服せよといふ意味である、ところ二人は石地藏が頭を擦でられたほども感じないで、烟草をプカリ〳〵と吹かして居る、襟三はその光景を見て。

藤三「佛者の所謂緣なき衆生とはお前達だよ。

作平「殊勝だとお褒め下さりましたので御座りますか、何に私が旦那さまの爲自働車を見つけました位は、本公人の義務で御座りまするで御座りまする、お褒めのお言葉はナカ〳〵感れ入ります るで御座りまする。

作平は襟三が衆生と云つたを殊勝と取違へ嬉しく感じた。

作平「そんなをはさて置きまして、自働車屋さん、布哇のホノル、の名所は舊王城だけで御座るかな？。

運轉「何にそればかりなものですか、ホノル、には領事館もあれば本願寺もあり、女郎屋もありますア。

作平「女郎屋とは不屈千萬なものがあるの。

藤三「一國の風俗習慣經濟界乃至は流行の淵源を知らんと欲柳界を一見するに限るよ、必らずしも不屈千萬と一言きものでない、社會に女郎屋といふものがあるは、そ

Good morn. Good morn. Kiss give me

があるから[illegible]られたもので、歐米各國は勿論のこと亞細亞各國でも女郎なるものゝない國はない、これ女郎の必要なることを示して居るのだ。

作平は襟三の議論めいた變痴奇な言葉を聞いて呆れて居る、迎賓手は我意を得たりといはんばかりの顏色をなし。

迎賓「さうですとも、旦那のお言葉の通り私等無妻者には女郎は必要なものですとも。

襟三「さうだ、社會が理想的進歩の極度に達せざる以上は、食物や衣服と同じく確に必要物だ。

迎賓「では旦那、その必要物を見物なさいますか、大勢の中には隨分美くしい必要物が御座いますよ、チョイと貴方へ贈進と申てね。

襟三「ちや一番探檢を試みやうから行け。

迎賓「承知致しやした。

と迎賓手は勇んで速力を少々早めた、作平は襟三が女郎屋へ行けと云つたを聞いて吃驚し。

作平「旦那さま、さやな怪しからぬことをお仰せなさるものでは御座りませぬ、さやうな汚らしい場所へこの作平爺は旦那さまをお送り申すことは出來ませぬ、さやうなお心をお起し遊ばしますともあらうと、奥さまがこの作平をお供にお附けなされたので御座りますれば、作平は如何樣な儀が御座りませうともお制止申しまする御座りまする。

と云つて作平は毅然と襟三を睨んだ、その光景は二代將軍對大久保彦左衛新式のポンチに示したやうだ。

（四）忠義の腕力

米國聯邦の一である布哇のホノルヽと云へば、何となく外國のやうな感じがするが、一度脚を入れて見ると外國のやうな感じは起らないで、日本にある舊居留地へ入つたよりも、より日本の心持がする。昔時は酒屋へ三里豆腐屋へ五里と云ふたところが日本にあつたが、今は布哇にさへそんな土地はない、布哇島の中でも殊にホノルヽには一二町も行けば豆腐屋もあれば、お汁粉屋もあり揚弓屋のやうなものさへある、國民の覺悟だにあれば世界至る所を天照皇太神の御光は、隈なく照したまふのだ。襟三は作平の反對を耳に入れないで自働車を襟三の所謂必要物が居る、とある家屋に進ましめた。日本の青樓は大底大厦高樓と寸法が決定て居るが、歐米の青樓はそ

れと正反對で可成的人目を引かないやうな家屋である、その理由は歐米に於て我國の青樓の如く、大厦高樓を建て人目を引いたれば、國民の輿論は一日はさて置き一時間をも彼等に醜業をなさしめないと云つて娼婦は不完全なる現社會の一必要物だから、絶對に禁止することは不可能であるから、默許して居るといふ次第である。布哇も合衆國と合邦して居る土地であるから、さういふ點は合衆國と少しも異つて居らない。

運轉手、旦那、こゝが必要物の家屋です。

と運轉手は自働車をとある二階建の家屋の前に止めて、ピラリと飛び下り表の扉を『トン〳〵』と二つ三つ敲くと、襟三は運轉手に續いて自働車を下り扉の前に進んだ、作平はその動作を見て頗る不平滿々であるが、他人の居る面前で襟三に陳言をするも如何と苦味切つた面相をして自働車に腰をかけたまゝ、貧乏揺ぎもしないで居

る。襟三はそんなことを念頭にかけないと見へ、運轉手に續いて扉の前に近つくと、扉はキユーと内部から開かれて「お越しやす」と上方辯で云つて、全身を顯出したものがあつた、そのものを宜く見ると年齢は二十五六歳でもあらうか、頭髮は高襟式に束ね一輪の紅薔薇の花を挿して、身體に夜服を纏ふてその下に寢衣を着た、一寸した美人であつた、運轉手はその女を見て。

運轉「お初さん、お客さまを連れて來たよ。

お初「お一人かへ。

運轉「お二人よ、だから早く御案内をしなさい。

お初「徳やん、毎度有難う。

とお初と呼ぶ女は運轉手に云つて、襟三に向ひ丁寧に、

お初「何卒お入りやす。

襟三は女の顔にフト女の容貌を見ると、滿更惡てた容貌でなく布哇

る。樣三はそんなことを念頭にかけないと見べ、運轉手に續いて廊の前に近つくと、扉はキユーと內部から開かれて「お越しやす」と上方辯で云つて、全身を顯出したものがあつた、そのものを宜く見ると年齢は二十五六歲でもあらうか、頭髮は高樣式に束ね一輪の紅薔薇の花を挿して、身體に夜服を纏ぶてその下に襲衣を着た、一寸した美人であつた、運轉手はその女を見て。

運轉「お初さん、お客さまを連れて來たよ。

お初「お一人かへ。

運轉「お二人よ、だから早く御案內をしなさ

お初「德やん、御度有難う。

とお初と呼ぶ女は運轉手に云つて、樣三に對して

お初「何卒お入りやす。

樣三は女の聲にフト女の容貌を見ると、眼元鼻元口元ともに

には珍らしいと思はるゝほどの奚形なのに聊か吃驚して。

襟三「ハイ、何も有難う、それでは失敬しよう。

と云つて作平を顧視て。

襟三「この人に自働車の賃金を拂つて、お前も此所へお入り。

作平「私にで御座りまするか？。

襟三「さうだ。

作平「アノ私に……。

作平は二の句も續かず呆然として居つた。襟三は作平の樣子を見て面倒と思つたものか。

襟三「お前が手間取るやうなら僕は先に入つて居るから、後からお入りなさい。

と襟三は云つてプイとこの家の内へ入つて仕舞つた。運轉手は襟三が入つたので自働車に近附て作平に向ひ、

運轉「お老爺さん、お前さんは何故お入りなさらないのだ、此家へお入りなさるのなら貸錢は今夜貰はなくつても可いんでさア。

作平「この作平爺は斯やうな汚はしい場所へ入りませぬぞ。それは兎も角、自働車の貸金を拂ひませう、貸金は如何程ぢやな？。

運轉「米貨六弗頂戴致し度御座います。

作平「米貨六弗とは……、日本金拾貳圓ぢやの？。

運轉、さうでげす。

作平「アノ貸金が拾貳圓！。

と作平は吃驚した。

運轉「拾貳圓にお安うげすよ、拾貳圓では案内料だけ割引になつて居るんです。

作平「御引で拾貳圓！。

運轉さうでげす、それで普通より少々お安値してあるんですよ。

作平は拾貳圓は格外の貸金であると思つたが、何を云ふにも土地不案内のことであるから不性無性、米貨六弗を運轉手に渡し。

作平「成程、西洋は怖しう早い國だと聞いて居つたが、如何にもその通りだ、自働車も早ければ時間も早く不廉貸金を取るところで御座るて。

運轉手は貸金を受取れば外に用事はないと、ヒラリと自働車に乘つて、何所ともなく影を消し、作平は自働車を見送り、呆然として立つた。

* * * * * * * * * * * *

禁三はお初と呼ぶ女に連られてトある一室に入つた。その室は四坪もあらうと思はれる面積で、中央に丸い卓が据へてあつて、それに七八の椅子が配置してあり、室内の一隅にピヤノを一臺据へ、その

横に横臥蓋が一非あつて、壁間に俗臭強い油畫の額が掲けてある。

お初は襟三とその横臥蓋に腰を下し、

お初『貴方さんは新來はんやおませんか。

襟三『新來！これは驚いた、先に御者に新來と呼ばれ、今また君に新來と云はる、二十世紀の世界的紳士も、卿等に何等の價値なきぞ是非なしか　アヤ、、、。

お初『そないな無つかしいとは布哇では流行まへんわ。

襟三『流行ないかね。

お初『流行ますもんかいな、そんなとを云ふてお居るより、ウイスキーを飲む方が可しうおますわ。

襟三『ウイスキー？、これ頗る妙だ、流石は布哇に來て居る女だけあつて、確に幾分西洋化して居るね。

お初『そんならウイスキーを云ひまつせ。

襟三『イエス。

お初は立つて側に設置ある電鈴を鳴らすと、間もなく一人の布哇土人の給仕が出て來る、お初はその給仕にウイスキーを持參するやうに命じると、給仕は『イエス』と答へ去つた。

お初『貴方はんのお姓名は何と申ますのや？。

襟三『僕の名か、僕の名は……高……田、實といふのだ。

お初『高田實はん！、私は聞いたとのある姓名のやうに思ひまつせ。と云はれて襟三は聊か面を喰つた樣子。

お初『さう〳〵私思ひ出したわ、高田實さんといふたら壯士俳優でおました。

二人は猶談話を續けて居ると、トン〳〵と扉を敲いて給仕は、盆の上にウイスキーと鑛泉水を双べ、それに酒盃と乾酪を添へて持つて來て、兩人の間に置いてペコ〳〵と頭を下げ退いた。

お初『高田はん。

と襟三を呼んだが、襟三は出鱈目に高田だと、云つたことを忘れて返事をしなかつた。お初は返事をしないのを見て、思はせ動作をするものとでも思つたものか、襟三の膝をイヤといふほど抓り。

お初『憎らしい御方やは。

と云つた。襟三は不意に抓られた痛さに吃驚し、顔を顰めつゝ。

襟三『アイタ、、、これは驚いた、お初さん、お前さんは大変な大力だね。

お初『女の一念の力でおます。

と云つてお初は裁判所の受附員の如く済したもの。

襟三『一念か二念か知らないが、僕は抓られて残念だ。

と襟三餘程巧く洒落たつもりで云つた、然し相手のお初は對岸の喧嘩を見る如く悠々済した面色。襟三はそれを見て聊か氣抜の體。何の事はない對岸の火事を眺めて居る間に、擬徒に時計を盗まれたといつたやうな風。

お初『そんなへな變妙な面色をせずに、早うウイスキーをお飲りなはれ。

お初は一氣息にウイスキーの酒盃を空虛て、その酒盃を襟三の手に渡した、それから漸々と酒盃の應答が盛んになつたが、はてその末は如何なるとだらう？。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

日本なれば早朝烏が『孝』と啼くか『阿呆』と啼くかなれど、ホノルゝの早朝には烏の聲聞きたくも聞けない、そこが外國である一つであらう、然しホノルゝの市街を離れて甘蔗畑に行つて見ると『私の父さん、私楽て暮いて苦労して居る布哇島』なぞといふ日本の内

地でゃも稀にしか咽くとの出來得ない、日本語の俗諺の聲を聞くとが出來る、こんな俗諺は『てにをは』が如何だとか斯うだとか、無つかしいとをいふ歌人といふものゝ耳には、銭一文の價値はないだらうが、詩味といふ點から云へば確に自然の聲だ。

何國も朝の空氣は、人間を利口にして呉れるものだが、殊に青樓に於る早朝の冷やかな空氣は、一層人間を利口にして呉れるものだ。

青樓に於いて早朝眼覺めて、敵妓の寢顏を見たときは、昨の春夜の果敢なさと、それをあこがれた自分の恐を、思はないものは極めて少なからう。

襟三はフト眼を覺すと、早朝から温暖い太陽の光りは硝子窓を通じて、帷幄が炎火のやうに赤くなつて居つた。襟三はそれに驚き飛び起きて、昨夜のとを考へて見と、我身ながら我身の恐に呆れて、飛んだとをしたと聊か後悔した。それと倶に『作平は如何したらう？』

といふ心配がムラ〳〵と起つて來た、さうなると襟三は氣が氣でなく。

襟三『オイ〳〵女、僕は大變なとを忘れて居つたから、直ぐ歸へるよ。』と云つて襟三は泡を喰つて洋服を着け室外へ飛び出さうとした。眠つて居つたお初は、襟三が出て行かうとするのを見て、狼狽て飛び起き襟三を確と抱き止め。

お初『高田はん、貴方はんは何所へ行きなはるのや、私に仕拂もせん逃亡やうとは……、そんなとをしなはる點を見ると、江戸辯を使用て居なはるが、貴方は紀州の人間やな、油斷して貴方等に喰ひ逃しられるやうな私やないし、さア仕拂をして行なはれ。』

襟三は周障たまゝ仕拂をすることを忘れ、お初に一本『お面』とまゐらされ。

襟三『これは氣の毒だつた、僕は急いだものだから忘れたのだ、唯

逃げをしない證據には、お前を起したではないか、了解つたかね、僕はそんな卑劣な下等な人間でない、さ仕抦をするから幾何か早く云つて呉れ。

お初「終夜が二十弗とウイスキーが五弗で二十五弗でおます。

標三「二十五弗ー、日本金五十圓とは頗る不廉だね、ア、これを思へば烏森の阿婆は廉の廉なるものだ。

標三は不性無性、二十五弗を投げるやうに寢臺の上に置き、逃るやうに青樓を出ると「旦那さま」と呼ぶものがあつた。

標三「旦那さまと呼んだは何人だ？。

と立留つて見ると作平であつた。作平は眠むさうな眼で標三をヂッと見て。

作平「旦那さま、御前さまは昨夜から今まで、この家屋で何をしてお居でゝ御座りまして御座りまする。

標三「僕か、僕は……、その作平爺、僕が惡かつた堪忍して呉れ。

作平「御前さまは御酒をお飲みなされましたり、怪しい阿女を相手になされまして御座りまするが、この作平は奥さまの御命令が御座りまするで、御前さまの御身體に萬一のことが御座りましては、この作平は申譯が御座りませんから、昨夜から即今まで、この家屋の戸外で御前さまのお出かけ遊ばしまするを待つて、居りましたので御座りまする。

作平の言葉を聞いて、流石の標三も一言もなく。

標三「爺、惡かつた〳〵。その代りには自今お前の云ことを聞くから昨夜のことは水に流してお呉れ。

作平「私は如何でも關ませんが、御宅に御在らつしやいます奥さまが、如何位御心配して御座らつしやるかと思ひまするとこの作平爺はお氣の毒でなりませんで御座りまする。

禁三『さうだ、僕が悪い。

作平『さうお仰せで御座りますれば、この作平は昨夜のとは水に流しまするで御座りますれば、その代りに作平の無心を一つ是非承諾で下されたう御座りまする。

と云つて作平は禁三の面を眺めた。

禁三『何なとか知らないが、何なとでも僕は承諾てあげやう、全體お前の無心とは何なことだ？。

と云はれて作平は嬉しく。

作平『私の無心で御座りまするか、それは他のとでも御座りませんで御座りまする。旦那さま、この横町に絵端書屋が御座りまする で、奥さまへ布哇の絵端書を郵送つて、おあげ下さりたう御座りまする。

と聞いて禁三は呆気に取られた。このときお初は硝子窓を明けて。

お初『表面優しうても油断をするな、行こら〳〵は紀州盗人。

と布哇の俗謡を唄つて、禁三を眺めホヽと笑つた。

（五）僕は日本紳士だ

天洋丸はホノルヽを出帆後五日間浪を蹴つて桑港へ到着た。北米の西部は日本であれば北海道といふやうに、農産物を除けばその他のものは東部より遥に進歩に遅れて居る、と云つて我國の北海道は勿論のこと、東京よりは遥に物質的のことは進歩して居つて、住民の氣質は遺憾なく自然を發揮して居る、然しそれは白色人種に限られてゐつて、東洋から渡つた移民は自然を發揮するどころのことでなく、明食弱肉といふ怖しい定義の下に於いて、ヤヽもすると肉體より大切な自由をさへ、白色人種に喰はれて居る、排日なぞと騒は『喰うか』

といふ化物の叫聲である。

物質の設備が充分だから、巨船の天洋丸も何の苦もなく税關の棧橋へ横づけになつた。乘客はそれと見より船内の給仕に荷物を運ばして船内を離れ、税關官吏に荷物の檢査を受けドヤ〳〵と去つた、然しそれは白色人種の乘客ばかりに限られてあつて、税關官吏が彼等に對する荷物の檢査の寛大さは、確に文明國民の大度量を示して居る。他の船客が上陸したのだから禁三は、彼も一等船客なら僕も一等船客だから、彼等の如く僕も上陸しよう、一刻も船内に居る必要はないと、禁三は作平と給仕に荷物を携帶せしめて、日本の模範紳士は斯くいふ高非禁三だと、いはんばかりに税關内に來た。然し税關官吏は禁三の荷物を檢査しようとしなかつた。

禁三『税關吏は人相を見ると見へ、僕のやうな大格の高い人間は決して輸入禁止なり、若くば關税も納めなけりやならないうやなものを携帶して旅行をしないと、思つて居ると見へ白色人種の船客の荷物を檢査したやうに、忙てゝ荷物を檢査しようとしない、殊に仍ると無檢査で、通過させるつもりかも知れない、さう思ふと人間は人格が第一だ、作平なんとさうではないか。

作平『さうで御座りまするとも、鋼は何所へまゐりまして鋼で御座りまするで御座ります。

禁三『さう云へば、さうだな。

己惚は何所までも禁三を離れない。

禁三『給仕、それでは直ぐ旅館へ行くから、馬車を命じて呉れ。

給仕『へイ。

と答へて給仕は高聲をあげて、御者を呼ぶと、一人の御者は走せ來つて。

御者『給仕長、馬車が入用なのかい。

給仕「さうだ。

御者「何所へ行くのだ？。

給仕「何所だか、お船客さまに聞いて見な、そこに居らつしやるがお船客さまだ。

御者は給仕に教へられて襟三に向ひ。

御者「何所へ行らつしやいます？。

と云つたが襟三には聞き取れないと見へ何の返事もしなかつた。

御者「オイ、給仕長、このお客さまは英語を了解ないのだね。

給仕「さうだよ。

御者「ちや、何所へ行くのか聞いてくんねえ。

給仕は御者の依頼に仍り。

給仕「貴方は何所の旅館へ行らつしやいますお積りです、御者が聞いて呉れいと申します。

襟三「さうか、さうなら早く僕に尋ねれば可いに、遠慮し尋ねかねたのだよ、そんなところは勞働者に似合はない點がある。

給仕「何に、貴方にお尋ね申したのですよ。

襟三「オヤさうだつたか、僕は高尚な英語しか習得ないものだし、ところが彼の英語は下等な言葉であつたから、了解なかつたのだらう。

襟三は何所までも負客み。給仕は『生意氣な青二才奴、上陸したら今に赤恥を曝らすに決定てらア』と思ひながら表面は丁寧に。

給仕「さやうで御座いませう、貴方さま方はお學問をなさいます英語で居らつしやいますもの、こんな下等な野奴の言語はお耳に入りませんとも。

襟三「全くその通りだ。

襟三は作平と俱に御者に荷物を運ばして、税關の外へ出やうとした。スルト税關内に居つた官吏らしいものが二三名、バラ〳〵と襟三と作平に近附て。

官吏「お前等は無斷で何所へ行くか？」。

と云つた。給し二人ともその意味が了解ないので、返答をしないでサッサと行きかゝる、官吏らしいものはそれと見て。

官吏「行つてはならない。拙者は移民官吏だぞ、だから拙者は職務を以つて、汝等が税關外に出ずるを禁ずるのだ。」

と云つて嚴然となつた、二人は何をいふのか了解ないが、作平は官吏の見幕が普通でないから氣にかゝり。

作平「旦那さま、この人達は何でこんなに無つかしい面色をして、グヅ〳〵いふので御座りまする。」

襟三「これかい、これはな、旅館の客引で僕に何かお止宿を勧めないと、

申して居るのだが、こんな人相の惡い人物が居る旅館へ、僕は行く氣がないから相手にしないのだ。」

作平「へー。」

と云つたが、内心そんなことであるまいと思はないでもなかつた。移民官吏は制止して居にも關はらず、襟三が行かけるのを見て「警官」と呼で警官を呼び、襟三作平を引渡さうとした、襟三もさうなつて見ると、ナカ〳〵濟込んで居る勇氣はなく、面色を若白くして。

襟三「僕は日本の紳士だ〳〵。」

と半泣きの聲で云つた。物見高いは日本ばかりでない、外國だつて同じことだ、この光景に見物が一人增し二人增しゝて、果ては襟三作平を圍むやうになつた、それに襟三は愈々慌いて。

襟三「僕は紳士だ〳〵。」

と連發するのみで如何にして可いか、方法を知らなかつた。作平は、

『こんなときは天輪王さまをお頼み申すが第一だ』と例の祈願をはじめた。

作平『南無、天輪王の尊、助けたまへ天輪王の尊……。

と大聲をあげはじめ、主人の身に凶事なかれかしと熱心に祈願つて居ると、一人の日本人が來て。

日本人『僕は移民局の通譯ですが、君等は如何なさつたのです。

襟三は通譯者と聞いて地獄で佛に會つたやうに喜んで、その者に最初からの事情を話をした。

通譯『さうですか、貴方は一等船客だとあれば、決つして移民としての待遇を受くべきものでないです、よろしい僕が移民官にそのことを話してあげませう。

と云つて通譯は移民官に向ひ何か會話をすると、移民官は通譯者の言葉を聞いて何々と笑つて、通譯に何だか話した。

通譯『貴方達は何時でも上陸なさつて差支はありません、僕がお送支がないやう、移民官へ談判をして置ましたからそのお積りで……。

襟三は何時でも上陸せよと云はれたので安心した、スルト例の病氣が出て。

襟三『僕は當地第一の大旅館へ行くつもりですが、何館が可いでせうか。

通譯『さうですね、第一と云へばパリス旅館へ行らつしやるのです。

パリス旅館のものは僕も承知して居りますから、僕の名刺を差上げませうから馬車で行らつしやるが可いです。

通譯者は名刺を出して、その裏面へ何かサラ〳〵と書いて、渡した襟三の荷物を運んだ御者を呼び『パリス旅館へ行け

た。禁三は「ヤレ助かつた始しや」と行かゝると、再び税関官吏は禁三に「行くとはならない」と云つた。禁三はそれを聞て二度吃驚。

（六）部屋の天上

禁三と作平が乗つた立派な馬車につけられた二頭の馬は、御者がパチリと鳴らした鞭の音に勢氣つき、蹄跡は道路の敷石に觸れて火花を散らし、桑港第一の繁華なマーケット街に颯然と建つてあるパリス旅館に着いた。旅館のものは馬車が着いたを見て「お客さまだ」と馬車に近寄つて、叮嚀に馬車の扉を明け。

旅館給仕「今日は御機嫌克くお着きなさいました、さ、お下車遊ばしまし。」

給仕は禁三作平の手を取らんばかりに丁重に下車を勧めた。然し禁三は元旦が一年に五六回もある國で生れた人かのやうに、愛長に構へナカ〳〵下車しようとしないで作平に向ひ。

禁三「のう、作平人間は兎角沈着て居らなければ失敗をするものだ、だから昔時から急いては事を仕損ずると云つてある、この旅館へさへ着けば安心なものだから、お前も氣を落附て居るが可いさないで故意と落附拂つて居る。

禁三はホノル、にて失敗したゝめ意氣消沈して、例のハイガリを出

作平「さやうで御座りまする、お仰の通り安心致して居りまするで御座りまする、汽船に居りました期間と申すものは、暗礁に乗上げはせぬか、沈没するやうなことはありはせぬかと、一通ならぬ心痛を致しまして御座りまするが、斯う陸上に落きました以上は沈没して溺死とは、決して御座りませんで御座りまするで、作平も安心致しまして御座りまする。

禁三「さうだとも昔時から陸上で溺死したといふとは、聞いて居らん

からね、先づ安心するが可い、その點は僕が保證して置いてあげるよ。

作平「旦那さまの御保證で御座りますれば、安心なもので御座ります る。

陸上で溺死せぬとの保證は確實な保證だ。保證もさういつたやうなことであるなれば、保險會社も颶風の心配は必要ないといふものだ。

旅館のものは襟三と作平が何だか不了解語を云つて馬車から下りやうとしないのに呆れ、旅館の給仕は密々と。

甲給「アノ二人は日本人でないと思ふが如何だ？。

乙給「日本人だよ。

丙給「日本人でなくば何國人だ？。

甲給「支那人よ。

乙給「支那人ぢやあるまい、日本人だらう。

甲給「あんな日本人があつて堪るものかい、それこそ日本の天皇がお慨歎なさらア。

乙給「何故？天皇がお慨歎なさるのだ。

甲給「だつてお慨歎なさらうぢやねへか、今日までこの旅館に到著た日本人のお客さまは機敏な方ばかりで、馬車が停止か停止ないにヒラリと下車て、サッサと帳場へ入つしやるに、アノ奴さんを見ねへ下車やうとしないで、何だか不解語を云つて居ぢやねへか、こんな調子の野呂間は支那人に限つてらアな、だから若しアノ奴さんが日本人だつたら天皇が『アヽ我臣民に彼の如きものがあるか慨歎の至りだ』とお仰しやるに決つて居るよ。

丙給「さう云へば成程支那人らしいよ。

甲給「らしいぢやねへ全然支那人さ。

乙給「支那人だらうかね。

甲給「支那人さ。

丙給「支那人なら一番馬鹿にしてやらうぢやないか。

甲給「お前は支那人だと何日も仇敵のやうにいふが、そんなに支那人が悪いか。

丙給「悪いよ、支那人と咄くと胸がムカ〳〵すらア。

乙給「何故だ？。

丙給「何故つて、それには曰く理由あり因縁があるんだ。

甲給「因縁て如何いふとだ。

丙給「他ぢやないが自己が以前働いて居つた主家に、支那人の料理人が居つたが、その野郎は滅法界根性の悪い野郎で、自己に満足な食事を喰せねへで、給仕女にばかり美味ものを喰せやがつたから、喧嘩して頭をポカリと殴打て自己はその主家を飛出した

乙給「だから支那人を好かないといふのか？。

甲給「何にそれだけぢやねへよ、それから主家を出てこの旅館へ備はれたが、自己は給金の八分まで支那人の馬鹿票を購買て居るのだに、未だ一度も迫中つたことがないのだ、だから支那人は自己の為に戚情の仇敵であり、金銭の仇敵だ、如何だ自己が支那人を悪いと思ふのは無理ぢやあるまい。

乙給「あんまり道理でもないよ。

給仕等は最初耳語て居たが、襟三作平が少しもそれに注意をしないのを見て、彼等は襟三作平が英語を了解しないものと思推ものか、果ては聲をあげて両人の悪評をはじめた。

襟三はこれだけ沈着の態度を取つたれば充分と思つて。

襟三「作平、徐々と下車しよう。

作平「ヘイ、それがおよろしう御座りまする。

二人は徐々と下車した。給仕は二人が下車したのを見て「何か此方

へ』と云つた。

禁三『イエス。

と答へた、然し禁三は給仕の言葉の意味を解したのでなく『イエス』とさへ云つて居れば、大した間違は起らないだらうといふ、隨分心細い考慮から出たのである。

作平『旦那さま何所へ行くので御座りまする、これ位大した建築物で御座りますると、除程お氣をおつけ遊ばしませんと、大變なことが起るやうなことになりませう。

作平の注意は道理千萬だといふのは、作平はホノルヽに於て、禁三の自稱西洋通なるものゝ、價値を眼寶見したのだから、表面は禁三の言葉を信じて居るやうに見せて居るが、內心は禁三が臆想だに出來得ないほどどクついて居るのだ、それ故知らず〳〵禁三に向つて注意の言葉を發したのだ。

禁三『これ位の建築の旅館は何處にでもあるよ、これから東方へ〳〵と行けば行くほど、旅館が立派になつて居るのだ、この旅館は漸く六階建築に過ぎないが、東方の大旅館は百三十階建築のものがある。

作平『百三十階！

作平は呆れて禁三の顏面を眺めた。

給仕の案內に導かれて、二人は旅館の帳場へ來た。帳場に居る番頭は流石客商賣に馴れて居だけあつて、二人を見るより馴々しく。

番頭『紳士、何卒その帳簿へ御記名を願ひます。

と云つて帳場の前に備へてある大きな記名簿を指で示した。禁三は例の如く言語は通じないが、東京の帝國旅館だのメトロポール旅館だのに、東京に居つたとき出入して居たいけあつて、記名簿へ記名するとを熟知て居たから、作平に『これ見よ』と云はんばかりに、

ペンを取つて自分と作平の姓名を記入し、作平の横へ従僕と加へ、番頭に通譯から貰つた名刺を渡した。番頭は名刺を受取て一瞥し。

番頭「何も有難う存じます。

と禁三に挨拶して、給仕に向ひ。

番頭「この紳士を二百〇三番室へ御案内申せ。それから、従僕を六百八十五番室へお迎れ申せ。

と云つて二人の給仕に一個づゝ扉の鍵を渡した。二名の給仕は「サア何卒此方へ」と云つて禁三作平を案内し昇降機に導いた。禁三は昇降機のことは兼てより承知して居るが、作平は少しも知らないのだから、扉を開けて昇降機に乗つて。

作平「旦那さま、この部屋は小さな部屋で薄暗いところで御座りますな。

禁三「これは部屋ではない、昇……

と語はうとするとき扉がピタリと閉られて、昇降機がスート上した。

作平「ヤア〳〵この部屋は天上するぞ。」

と作平は思はず叫んだ。その鈍狂な聲に給仕をはじめ昇降機を[illegible]て居る給仕も「フヽヽ」と吹き出しかけた。禁三も餘りの鈍狂聲[illegible]はないで居られなかつた、昇降機はスーと四五間も昇つたと思[illegible]ピタリと止まる、一人の給仕は禁三に「紳士は此方へ」と云つて扉を開けて禁三と俱に外へ出た。作平はそれと見て自分も出づべきものと思つて、禁三の如く外へ出やうとした、給仕は作平が出かけやうとするのを見て。

給仕「貴方は六階です、こゝではありません。」

と云つたが作平は勿論言語が通じないのだから、耳にもかけないで出やうとした、給仕は自分が注意して居るにも關はらず作平が出か

けやうとするのを見て、作平が英語を解し得ないと思つて、動作を以つて教へる外方法ないと、出かけやうとする作平を抱き、昇降機の給仕に『六階へ』と命令した。そこで扉は再び閉られて、スーと六階へ昇つて行く、作平はそれと見るより吃驚し。

作平『上げては否かん〳〵、旦那さま〳〵。』

と連呼ぶ。給仕は作平の鈍間さに『ハヽヽ』と笑つた、作平は給仕の笑つたのを見るよりカッと怒り。

作平『ウヌ、大切な旦那さまとこの作平を離間し置いて笑ふとは不屈千萬な野奴だ、忠義に凝つたこの作平の腕前を喰へ。』

作平は猿臂を伸して給仕の頸を捉へポカリ〳〵と頭を殴打た、給仕は不意の亂暴に悲鳴をあげて泣き叫んだ。

（七）何でも損害

旅館のものは昇降機の方から苦しさうな悲鳴が聞へたので、これは普通事でない、何か非常なことが起つたのに相違なし『それ行つて早く救助い』と猫も杓子も我一と昇降機室に進めば進むほど悲鳴は高くなつて、手に取るやうに聞へた『さては昇降機に何か大きな故障が起つたのだ』と扉を開いて昇降機を見あげると、昇降機の乗客室は無闇と四階と六階の間を上下して居つて、悲鳴はそこから洩れて來る。

作平『コン畜狗の小僧奴！忠義に凝つた作平の腕は鋼鐵だぞ。給仕』『免下さい〳〵。』

と力の籠つて居らない泣聲でいふ。その聲の力なさは階段中アリン

ナ洲の砂地を吹いて居る風のやうだ。作平の怒鳴はそれと正反對でナイヤガラ瀑布の水聲のやうだ。

旅館のものは昇降機室内に如何なる珍事が起つて居るか、明了に知らないのであるが、何はさて置いても昇降機の運轉を停止させなくては、内部の事情が判明ないといふので。

旅館のもの　昇降機の運轉を停止い。

と叫んだ。その聲が通じたと見へ昇降機の客室は、五階にペタリと停止た。旅館のものは「サア占めた、五階へ行け」とドヤ〳〵と五階へ上つて、昇降機の客室の扉を開いて見ると、作平を六百八十五番室へ案内せしめるため添へた給仕は、可哀相に作平の脚下に縋さへられて、ヒイ〳〵と悲鳴をあげ、作平は虎を押へた和藤内好しくといつたやうな風に、給仕を脚で押へ眼をグリとむいて居り、昇降機を言つて居る給仕は、作平を認めて果然に取られて居つたり旅館

の帳場のものはその光景を見て仔細は不明であるが、兎も角も給仕を救ふてやらなければならないと、作平に向ひ慇懃に。

番頭　給仕が如何樣の無禮を致しましたか存じませんが、兎も角もこのものをお釋放し下さいまし。

と云つたが作平は勿論その言語を了解しないのであるが、番頭の慇懃な動作に不性無性ながら、押へて居つた給仕を放ち。

作平　この小僧は宥恕してやる、さるかはり私を直ぐ旦那さまのところへ連れて行け。

と作平は日本語で云つて、彼等が案内するを待つたが、旅館のものは日本語を解し得ないのだから、作平のいつた言葉の意味が少しも了解ない、そこで彼等は通辯がなくては如何するとも出來ないといふので、兎も角も作平の主人を呼んで來いといふことに相談を決定て給仕の一人は樣三を迎ひに行つた。

作平「サア如何する、早く旦那さまのところへ私を連れて行つて呉れ。」と作平は連呼て居ると、鈴仕の案内に従つて襟三と、税関に於て通譯の勞を取つて呉れた、移民局の通譯者が來た。それを見て作平はイキリ出した、怜も家犬がその飼主の顔面を不意に見たかのやうに。

作平「旦那さま〳〵。」と大聲を上げて叫んだ。襟三はその聲を耳にかけず作平に近づき。

襟三「作平、お前は何故亂暴をしたのだ、世界的紳士たる高井襟三の名譽ある從僕たる身分を顧慮ないで、腕力は男夫の勇たるに過ぎない、世界の一等國民たる日本人たるものが、そんなことをすべきでない、さういふ亂暴なことをするから日本國民は嫌ひ好きな國民だ、なぞと外國人に誤認されるのだ。」

作平「旦那さま、貴方さまはさうお仰しやいますが、私の身になつて見ますると、大切な御主人さまと私の身體とを隔離されました

ので御座りますから、何んなに心配で御座りませう、何れほど心外で御座りませう、この作平は旦那さまの御身の上を奥さまから……。

と云はんとする作平を襟三云はしめず。

襟三「エヘン〳〵、オホン〳〵。」と咳拂で紛らし。

襟三「そんなことは本作には何等の關係のないことであるから、喋々といふ必要はないぞ、それよりは何故お前は野蠻な行爲をしたのか。」

作平「野蠻の行爲をしたと旦那さまはお仰やいますが、私は決して理由もなうこの小僧を懲したのでは御座りません。その理由と申しまするは、今日が日まで旦那さまと半時も離れたことは御座りませんのに、この小僧は不屈にも旦那さまと、私を離れさせました、それで私は早く旦那さまのお側へ私を連れ

て行けと、申しましたにこの小附等は耳にもかけませず、そこの巧妙な部屋に私を入れたまゝ、私を高いところへ上げやうと致しますから、ッイ……。

糸三「ッイ……、とは何か、作平、西洋では主人と従僕とは身分が違つて居るから、私を二階の上等室へ案内し、お前を六階の従僕室へ案内しやうとしたのだ、それは西洋に於て普通のことである

それを思はないで亂暴するとは不都合千萬であるぞ。

糸三は作平を叱責つて移民局の通譯者に向ひ。

糸三「三谷君、お聞きの如き次第で従僕の誤解から起つたことですから何とか君の御盡力で巧く平和に局を結んで下さいな。

通譯者の三谷幸作は最前よりの話を聞き「アー」また例の新來者の失敗かと、心中可笑しく感せしも、表面は眞面目に。

三谷「御承知の如く西洋では正當防禦の外、腕力を弄するは甚だ罪の

輕くないことですが、他ならぬ貴方の御従僕のことですから、何とか平和な話に纏めませう、然し相當損害金は給仕に與へなければなりませんが、それは御承諾を願ひます、何と云つても米國は損害倍償流行の國ですからね。

糸三「損害倍償！それは承知して居りますが、給仕を押へつけたいけにでも損害倍償の必要があるのですか。

三谷「ありますとも、それ位は普通ですよ、一周間ほど以前も、美人の面前で嚏をしたといふので裁判所へ損害を訴へられて居るものさへ御座います。

糸三「エーッ！嚏をして？！。

（八）口説の虎の巻

茲所はパリス旅館の二階の一室。室内の粧飾は流石に桑港第一の大旅館として至れり盡せりで、高價な土耳其製の敷物は泥靴を以つて、踏むを禁せず、名畫伯が心血を濺いだ額は壁間にかゝげられ、珍木の卓椅子はそれに準じて配置せられ、天井に照れる電氣燈は色硝子を應用したれば、美くしく光輝を放つて居る。この一室の主人は吳越、春秋、夜々異なるが、今夜は高井襟三である、襟三は移民局の通譯者である三谷幸作と、卓を距てゝ談話を續け、作平は隅の方に据へてあるソファに元氣なげに倚れて居る。

襟三「三谷君、御盡力は實に有難う御座いました、彼れ作平は決して惡意のないものですが、何をいつても海外の事情は一も解して居らないもので、唯一御主人大切と思つたものですから、あんな惡劇を演じたので、主人たる私は實に汗顔の至りです。

三谷「何に洋行者の失敗は敢て珍とするに足りません、堂々たる政治家や立派な學者さへ、お話しにならないことを仕出かした例は少なくないのですもの、それをいへばエーなんとか云はれました ね、オーさやう〳〵作平さんですかゝ、失敗をなさいましたは無理もないことですよアハ、、、。

襟三「成程。さういへばそんなものでせう。

三谷「然し作平さんの失敗は頗る盛的な失敗で、僕は小倅の頭を見ましたが、餘程手強く殴打れたと見へ、その紀念物がポコリと出て居りましたよ、ですから交渉が頗る困難でありました。

襟三「作平。

と呼ばれて作平は家犬が飼主に叱咤られた後直ぐペスと呼ばれたか

のやうに、恭々悦々と襟三の前に進み叩頭しながら。

作平「へーイ……

襟三「作平、へイではないぞ、自分は充分に注意をして、今日のやうな野蠻なことをしてはなりませんよ。あんな亂暴をしたに關はらず、無事に濟んだは三谷君の御盡力があつたからだ、三谷君にお謝辭を申しなさい。

作平「三谷さま、何も有難う御座りまして御座りまする。

三谷「イヤ何う致しまして、マア無事に濟んで何より結構でしたアハ、、、。

と一笑して三谷幸作は襟三に向ひ。

三谷「ところで御重役……。

襟三は三谷に「御重役」と云はれ得意となり、指でチョロ髭を捻り、

三谷は襟三の態度を見て「此奴に立派なお上りさまだ」と心中密笑ながら表面は、愈々慇懃な態度を以つて、

三谷「御重役、御重役は當地から何國へ御出立なさいます、御豫定で御座いませうが、勿論當地の際では米國のみでなく、歐洲各國へ御視察にお出向きなさいますやうに申して居りますが、實際その通りで御座いますか？。

襟三は「當地の際」と三谷に云はれたので、さては僕の洋行は既に當地に在留して居る、日本人間の一話題となつて居るのか、僕は僕の名譽が海外にまで知られて居るとは今日まで、夢にも思はなかつたと、襟三は大喜びの大滿足。

襟三「私の洋行が當地の一話題になつて居りますか、ハ、ン。

と襟三は自分ながら感服した、然し實際は決して一話題になつたとはないのであつた。この三谷といふ通譯は新來の日本人と見ると、

種々の方法を講じて自分の金儲をするのを、職業のやうにして居るといふ人物で、俗にいふ亞米破戸淡の一人であるから、絶へず日本の新聞紙に眼を曝して居つて、金儲けの種を〳〵と注意して居るといふ、頗る危險な人物で日本に居つたなれば、豫戒令位は確に頂戴すべき人物だ、だから彼は襟三が掲載せしめた新聞廣告を一讀して襟三が來るを今か〳〵と綱を張つて待つて居つたのだ、若し襟三がこのことを知つたならアッと驚くことだらうが、知らぬが佛の襟三は茫然として三谷に向ひ。

襟三「如何にも君のお言葉の如く、歐洲各國へまゐつて事業の視察を致すのです、自分はそんなことをして居る時日に乏いのですが、政府の囑托を受けたものですから、止むを得ず從事するといつたやうな譯で……。

三谷「それは御苦勞なことでせう、然しそれも日本の國家のためですから、御名譽なことで歡迎に堪へません、若し僕の年齢が五つ六つも若ければ、是非從僕となつていもお引卒を願ふのですが、アー我老ひたりだ……。

と三谷は充分に油を襟三にかけ置いて。

三谷「ところで、御重役、貴方は日本で世界一周の乘客券をお購買になりましたか？

襟三「イヤ私は兎も角も桑港までと思つて、當地までの乘船券しか購買ませんでしたです、勿論從僕の分も矢張さやうで。

と聞いて三谷は「占めた」、と心中に喜び。

三谷「さうですか、では當地で汽車の乘車券をお購求にならなければなりませんね。

襟三「如何にも然樣です。

三谷「では何線をお採りなさいます御豫定で御座いますか。御承知で

居らつしやいませうが、當地から東方へ行らつしやるには、鐵道線路が一線や二線では御座いません。

樂三『さやう〳〵、それは自分も熟知て居るのです、だから熟考の上乘車券を購求とにしようと思つて居るのです。

三谷『流石に御重役は御注意至れり、盡せりで居らつしやいます。

樂三『何に、それ位のことが……。

樂三は益々大得意。三谷は愈々『占めた』と。

三谷『それ位のことは云はれますが、ナカ〳〵それ位のことでは決してありません、御承知で居らつしやるでせうが、日本人がこのパリス旅館へ初めて宿泊したのは、故岩倉公でありまして、その時の公の服裝は位冠束帶でありました。

樂三『位冠束帶とは野蠻だつたね。

三谷『如何にも野蠻で御座いました――が位冠束帶は變な洋服より遙

に優美ですよ。

樂三『優美は優美さ、然しその優美は二十世紀の文明的優美でなく、蹴鞠や歌加留多に歳月を送つた時代のお公卿式優美さ。

三谷『實に御高説の如くです。さて公の位冠束帶は旅館のものを吃驚させまして、旅館の主人は紀念のためだと申して、公を寫眞に採りました。

樂三『珍妙といふ立脚からだらう。

三谷『それは存じませんが、今日でもその寫眞は大切に當旅館に保存しられて御座います。

樂三『何も保存して居るとは、實に日本――殊に世界の一等國たる日本の名譽のため遺憾千萬ですな。

三谷『公の御洋行後、この旅館へ種々な日本人が宿泊致しましたが、多少とも失敗を仕出かさないものはありません。その内でも遊

しい失敗は、生命がけの失敗なんてふのがあります。

雅三「生命がけの失敗！それは何な失敗だつた？。

三谷「その失敗といふのは外でもありませんが、我國の某紳士――姓名は判然して居りますが、少々お氣の毒ですから某々紳士として置きませう、その某々紳士は汽船に乘つて、日本から當地へ著くと、直ぐ當旅館へ來られて一泊せられました、お兩人合部屋といふ客商な式で以つて。ところが夜の十二時頃夜番のものが館内の廊下を見廻つて歩行ますと、某々紳士の合部屋から瓦斯の臭氣が紛々とするのです、それ故夜番は驚いて瓦斯が漏れて火災が起つては、大變だといふので、廊下に設置てあります非常報知機を押しました。旅館のものは非常報知に一スワ火事だ」とドヤ〳〵と集つてまゐりまして、客室の扉の上にある空氣抜きの硝子窓を破壊して、夜番は室内へ飛込んで見ると、室

内は瓦斯が充滿て居つて、ウーン〳〵と呻く聲が聞へました。夜番はその呻聲が苦しく救を乞ふて居るやうに感じたが、充滿て居る瓦斯のため自分の生命が危險だと思つたので、夜番は手早く室内から扉を明け室外へ出て、ホット一氣息つきました。

雅三「ハテナ如何して室内に瓦斯が充滿て居つたのでせう。

三谷「それはその紳士先生が、瓦斯燈を燈火と同じやうに、ウント氣息を強め吹き消して、そのまゝコロリと寢たものですから瓦斯は遠慮なくドシ〳〵と漏出て、室内充滿になつて、その紳士先生は二人とも夢中に瓦斯を吸つたゝめ、今にも絶命しようとして居つたのです。

雅三「成程。

三谷「旅館のものはその光景を目擊たものですから、直ぐ室内の硝子窓を開放つて、瓦斯を四散すやら、呼々と呻いて居る二人の紳

士に、應急の手當をして醫者へ電話をかけるやら、大騒動を演じました。

雅三「それからその紳士は如何なつたかね？。

三谷「何しろ二人の紳士人事不省なとですから、病院へ入院させましたが、一人は生命を保全ましたが、一人は不幸にも死去せられたです。

雅三「不注意のため生命を失つたとは、氣の毒なとだね。

三谷「さうです、心あるものは同情を致します。それにその當時當地の新聞紙は、冷笑的に『日本には死斯燈の設備なきため、彼等日本紳士（？）は死斯の燈火を吹き消し、寢室に横臥しそのまゝ眠りたるため、死斯は室内に充滿し、二名の日本紳士（？）は人事不省に陷り、昨夜シテー病院に入院せり、彼等小さき日本人の勇氣なるものは、死斯を吹き消し死を怖れざるを意味するなるべし』と雑報欄内に掲載致しました。平素から日本人を

士に、應急の手當をして醫者へ電話をかけるやら、大騒動を演じました。

碧三『それからその紳士は如何なつたかね？。

三谷『何しろ二人の紳士人事不省なとですから、病院へ入院させましたが、一人は生命を保全ましたが、一人は不俘にも死去せられたです。

碧三『不注意のため生命を失つたとは、氣の毒なとだね。

三谷『さうです、心あるものは同情を致します。それにその當時當地の新聞紙は、冷笑的に『日本には瓦斯燈の設備なきため、彼等日本紳士（？）は瓦斯の燈火を吹き消し、寢臺に横臥しそのまゝ眠りたるため、瓦斯は室内に充滿し、二名の日本紳士（？）は人事不省に陥り、昨夜シテー病院に入院せり、彼等小さき日本人の勇氣なるものは、瓦斯を吹き消し死を怖れざるを意味するなるべし』と雜報欄内に掲載致しました。平素から日本人を

居る桑港の下等社會のものが、その獣性を讀んだものですから、無論にも我々に向つて「日本には『瓦斯燈』はない」などと云つて、罵詈の言語を放つやうになりました。

三郎「何に！日本に『瓦斯燈』がない？」

三郎「無禮でせう、失敬でせう。」

三郎「如何にも失敬千萬だ。そんなことを君等は云はれて敢て辯解しようとしなかつたのですか？」

三郎「勿論、國辱になるとですから僕等は、忌憚なく辯解致しました。」

三郎「さうでせう、日本臣民たる以上は爾かなくてはなりません。」

三郎「さういふやうな失敗が、その他に少なくありません、堂々たる代議士の椅子を占めた松本氏なぞも、當地ではありませんが、隣分類の稀な珍種を蒔かれたです。……

黑奴視……否なそれよりも劣等な人種であるかのやうに思つて居る桑港の下等社會のものが、その雜報を讀んだもですから、無禮にも我々に向つて『日本には瓦斯燈はない』なぞと云つて、罵詈の言語を放つやうになりました。

糊三『何に！日本に瓦斯燈がない?!。

三谷『無禮でせう、失敬でせう。

糊三『如何にも失敬千萬だ。そんなことを君等は云はれて敢て辨解しようとしなかつたのですか?

三谷『勿論、國辱になるとですから僕等は、忌憚なく辨解致しました。

糊三『さうでせう、日本臣民たる以上は爾かなくてはなりません。

三谷『さういふやうな失敗が、その他に少なくありません、堂々たる代議士の椅子を占めた松本氏なぞも、當地ではありませんが、隨分類の稀な珍種を詩かれたです。

雅三「堂々たる代議士の椅子を占めたものが……。

三谷「さうです。殊にその珍種が普通のことでなく、珍の珍、奇の奇、妙の妙と云つべきものです。

雅三「珍の珍、奇の奇、妙の妙と云はれるからには、稀有のことに相違ありますまいが、何んな珍談ですかお話し下さい。

三谷「ではお話し申しませう。

と胃頭を述べて三谷は眞面目に構へ。

三谷「中すまでもないことですが、故國を離れて海外に居留して居るものは、何人でも故山の月――花――雪に想慕ないものが御座いませうか、故山にある綠滴たる山、滿々たる流水は云はずもがな、脊門に立てる柳だに自分を招くと思ふては、一日も早く歸朝したいと思はぬものは御座いません。

雅三「それはさうでせうとも。故國を離れた西洋人でさへ、我國の明

媚な風光を見ては、旅情を忘れると云つて居るのだから、日本人が日本の風光を想慕るのは道理なことだ。

三谷「さうでせう。風光だに尙然りとすれば、溫和な愛情が交通て居る。骨肉緣者に對しては如何でせう。より〳〵多く想慕るでせう、それは自然の人情でありませう。

雅三「それはさうだとも。

三谷「さうですとも。さてお話し申します松本氏は、普通のもりよりも愛情――殊に色情に切な方でありましたが、渡米後その愛情を渡ぐ相手がないといふので、松本氏はその候補者を撰ばれました。

雅三「その候補者は何人ですか?。

三谷「貴婦人でせうか。

雅三「君が聞くのでなく、僕が君に質問をするのでないか。

三谷「それはさうですが、先づ貴婦人か、處女か、何人だか推的て御覽なさい。

鬱三「それは難問題だ。

三谷「ではお話し致しませう。その婦人といふのは、下等下宿の下婢です。

鬱三「下宿屋の下婢！

三谷「松本氏は自から西洋通を以つて任じて居るものですから、旅館なんかへ宿泊ては、不經濟だといつて、何所へ行つても三日以上滯在せられるときは、ノコ〳〵と下宿を捜し歩かれたさうです、その理由は松本先生は、表面は大紳士のやうに搖へては居りますが、裏面はナカ〳〵苦しい方で、隨分高歩貸に『その何が、何で』を云ふ方ですから、實際は風雅でもなく、酒落でもなく、仕様事なしの下宿屋住ひ、といつた寸法でした。

さて、松本先生はさういつたやうな風で、下宿屋住居を致しました。御承知はありますまいが、西洋の安下宿と云つたら、日本の安下宿よりも殺風景なものです。神田や本郷の安下宿の書生部屋は、殺風景な中にも机の上だの、窓の近傍には緑日の植木鉢の一個位は置かれてありますが西洋の安下宿にはそんなものは、薬にしたくもありはしないです。

鬱三「然り〳〵、そこに大和民族の美的な點があるのだ。

三谷「さういつたやうな下宿生活ですから、松本氏でなくも何人だつて故郷のことを想起ます。

鬱三「さう〳〵、そこが人情だ。

三谷「で松本氏に家郷病に罹つて、鬱々となられました。

鬱三「無理からぬことだ、論理上さうなるよ。

三谷「ところで松本氏は家郷病に對して、何等か慰藉を求めやうとし

たです。

雅三「それはさうだらう、旅行家が無味乾燥な砂漠を旅行すると、一枝の綠葉、一輪の紅花を見るべく望むと、僕は聞いて居るが、松本氏は如何なる慰藉を求められたね。

三谷「松本氏の慰藉は……、美人でした。

雅三「美人！

雅三は一杯を吃したと見へ『美人』と叫んだ。

雅三「そんな安下宿に美人があつたかね。

三谷「ありましたよ。

雅三「蒼綠叢中紅一點……詩的だね、ところで、その美人は何人だつた？。

三谷「その美人といふのは、その下宿の下婢でした。

雅三「それでは貴方が最初に云はれた下婢かね？。

三谷「さうです。

雅三「下婢なぞは大に日本紳士の名譽に關する少々ならずだね。

三谷「戀愛といふものは、名譽も財產も地位もあつたものでありません。

雅三「それはさうだらう。然し松本氏はその下婢なるものと、如何なる關係になつたね？

三谷「何しろその下婢が、毎朝松本氏の部屋を片附に參ました、その勞働ふりが頗る親切でありました、そこで松本氏はその親切なる點に著眼せられました。

雅三「親切は如何なるものをも動かすものだ。

三谷「さて親切な點に心ついて、その立脚點から見ると、下婢の一擧手一投足が總て松本氏に滿足を與へました。

雅三「西洋婦人の液臭の臭氣もかね？。

三谷「それまでは了解ないですが、菊石も笑窪といふことがあるから、波臭だつてヴイオレット位には行かずとも、人造麝香位の香氣になつたでせう。

鶴三「人造麝香！これは頗る妙だ。

三谷「で、松本氏は何でも彼女の好意に報ひなければならないと、思はれたのです、ところで氏熟々考へられると、彼女が氏に親切なは、彼女が氏に滿腔の熱烈なる愛情を濺いで居るといふとの推定が成立つたです。

鶴三「成程、それは道理千萬だ。

三谷「松本氏は十中の九否な百分中九十九まで、下婢が愛情を濺いで居ると、推定は致しましたですが。松本氏は會話が頗る下手であり、殊に氏は憲法第一條　天皇は神聖にして、犯すべからずとか、アダム、スミスの經濟論の要點はとか、社會政策の上よ

り論ずればだとか、六つかしい言葉は熟知て居られますが、見よ赤き薔薇花は如何に燃ゆる如き、愛情を示しつゝあるかをとか、この拙なき手紙が耶君の手に觸れなば、赤き色をや帶びなんとか、ヴイオレットの香氣は戀愛の優しさを、情人に送りつゝありとか、いつたやうな艶話とは頗る不得手なものですから氏は氏の意志を下婢に語ることが出來なかつたです。

鶴三「啞者の戀愛と同一だね。

三谷「マアそんなものです。ところで松本氏に如何かして、自分の愛情を下婢に傳へて、下婢の喜ぶ顔面を見なければならないといふので、氏は情話が巧妙になるやうと、戀愛小説を讀んだり演劇見物に出かけたりして、情話の練習を致されたです。

鶴三「頗る熱心だつたね。

三谷「さうです、熱心でした、然し松本氏は天性とでもいふのでせう

が、熱心に練習した効がなく、情話としては『アイ、ラヴ、ユー』位を漸く云ひ得るだけにしか、なられなかつたです。

雛三『成程、アイ、ラヴ、ユーは頗る妙だね。

三谷『そこで、松本先生は情話の練習は柄にないと、自覺せられたと見へ、折角購買た戀愛小説を悉皆二束三文に賣り飛ばして仕舞つたです。

雛三『それでは松本氏は下婢に對して、成功しなかつたね。

三谷『ところが成功せられたです。

雛三『とは頗る妙だね。

三谷『そこに頗る苦心が存して居るのです。

雛三『苦心とは？

三谷『前に述べました如く、松本先生は會話が出來ないところから故人久保田米僊翁が、列車に乘り遲れたとき、會談をせられた式

を採つて、松本先生は下婢に愛情を示すため、發聲を禁止して、居る例の卑猥な繪を下婢に示して、首尾好く運びをつけられたのです。

雛三『繪で以つて交情の媒介をせしめたと。

三谷『如何です、頗る珍妙な方法でせう。

雛三『成程、珍談だね。

その他に我國の紳士紳商の失敗談を、羅列れば隨分御座いますが、それは御旅行の先き〳〵で、自然とお耳に入りませうから申しません。

ところで、御重役、貴下が御從僕と共に東方へ行うつしやいますなれば、僕が代理人を致して居ります、鐵道會社の線路もお採用なさいますのが、第一御便利で御座いますが、如何で御座いませう、會社の方へ僕からその旨を申開けては……

『さうですね。税關以來貴方の御盡力になつたのだから、ではその線路を探るとに致しませう。

三谷『さうで御座いますか、では早速その手續を致して參ります。

と三谷は云つて『これで幾何か儲かつた』と、舌をペロリと出した。

それを作平はチラと見て。

作平『通辯屋さん、貴方は何が面白う御座いますのぢや、舌を蛇のやうにペロリとお出しなされたが……。

三谷は『ア、失敗た』と思つたが、眞面目に構へて。

三谷『お話を致す拍子に、一寸と舌を噛みましたので、ッイ……。

作平『長く西洋に居らつしやいますと、日本語をお話しなさるとが少ないで、そんな粗忽が出來るので御座るかな。

三谷『そんなもので御座いませうよ、アハ、、、。

(九) 助倍は好きだらう

桑港から合衆國の東部諸洲へ行くには、桑港マーケット街の波止場から、海路數迚を隔離つた對岸にある、オークランドへ渡船に乘てそこから汽車に乘るのである。高井禁三は三谷幸作に勸められ、三谷が代理を托されて居るといふ鐵道會社の線路を探るとに決め、その乘車券を購買て、作平を連れ旅館の馬車に乘り、マーケット街の波止場へ近附て來た。

禁三『作平、彼所が波止場だが、乘客が多數だと見へ隨分雜沓して居るやうだよ。

作平『さやうで御座りまするやうで御座りまする

禁三『さうだね。

と二人は車上で話して居る内、馬車は波止場の前に停止た。

襟三『さ、作平、下車しやう。

作平『ハイ。

と答へ、二人は下車をすると、附従て來た旅館の荷物係のものは、二人の手荷物を東方へ送るやうの手續を忙がし氣にして居る、スルトそこへ三谷幸作が來た。

三谷『ヤア、御重役。

と襟三は三谷に聲をかけられたので回顧つて、

襟三『三谷さんですか、貴方も東方へ旅行でもなさるおつもりで入らつしやつたのですか。

三谷『否！旅行を致すため、こゝへ參つたのではありません。御重役——貴方をお見送り申したいため參つたので御座います、ですから何か御用が御座いますなら、御遠慮なく仰せ下さい。

御重役をお見送り致ますのは僕の義務とするところであります。

三谷は他まで高井に油をかけ、嬉しがらせを云つた。襟三は三谷が云つた飜譯句調のお世辭に、ゾクゝと喜び。

襟三『さう君のやうは云はれると、この高井襟三は、如何に御挨拶をして可か、謝辭に苦しむですよ。

三谷『謝辭なぞを承はつては僕は益々困ります。日本臣民である以上は、我同胞のために盡すべきは當然の義務であります。普通の同胞に對してさへ、それであるのですから、日本の國家のため海外へ漫遊に出られた、貴方のために一臂の勞を取るは、臣民として名譽であります。

三谷は何所までも高井を嬉しがらす、さりとは亞米利加破戸淡の人の惡さよ。

高井襟三は例の如く、西洋通を氣取つては居るが、内々失敗に困り

て不安の念を禁じ得なかつたのだが、そこへ三谷が來て呉れたのだから、例の如く力み出し。

禁三「私は旅行案内記に仍つて、畧欧米の地理に通じて居りますが、從僕作平は欧米の事情を解して居らないものですから、苟もすると失敗を仕出かして困るです。といふ御本人それ自身が、作平に劣らない失敗を重ねて居るにさりとは口は闊法なものかな、それにつけて禁三の失敗をも自分の失敗のやうに、頭上へ浴びせられた作平こそ、引合はぬ役廻りである。作平もそのことは熟知て居らないではないが、主君の罪を我身に引受けるは、臣たるものゝ義務だ、忠義は即ちこゝが盡し所と作平は、作平。私が失策ばかり致しまして、旦那さまに御心配をかけて済みませぬで御座りまするで御座りまする。

三谷「洋行の失敗は何人しもあることで、故てお前さんのみでないですからね。

禁三は手荷物を旅館の荷物係に委任てあるが、萬一荷物係の誤解から、飛んでもない意外の地へ、手荷物を送るやうなことはありはしないだらうかと、懸念して居つたところへ、三谷が來たので渡りに船と。

禁三「三谷さん、私は旅館のものに手荷物のことを、委任して置いたのですが、市俄古へ着くやうの手續をして置きましたらうか、一寸問合せて下さいませんか、萬一未だその手續が出來て居らないのだつたら、その手續をさせて下さい。

三谷「承知致しました。

三谷は手荷物課に行つて、商井の手荷物を市俄古着の手續をした。彼れ斯れして居ると波止場の屋上に設置てある、傳鈴がガラン〳〵

と疑く、その音に多數の客は我一に波船に乗り込んだ、禁三も作平を連れ、オークランド行きの渡船に乗込んで、甲板上の椅子に腰を下し心細氣に三谷を眺めて居ると、「ボー」といふ一聲の汽笛と共に汽船は徐々と進行をはじめる、と三谷は波止場の汽船乗込み場に直立て、禁三に向ひ手巾を振つた。

渡しの汽船は二十分間を經てオークランドの波止場へ著いた。禁三は作平と共に汽船を下りて波止場のものに。

禁三「我々は東方へ行きます。」

と云つた、禁三がそれを波止場のものに話したは、さう云へば波止場のものが氣を利かして、禁三作平を東方行の列車へ、連れて行つて呉れるだらうと、思つて謎をかけたのだ、然し先方にはそんなとは知らないから。

波止場員「何所へ行かうと、それはお前さんの自由だ、僕の知つたことでない。」

と劍もほろゝに云ひ捨てた。その言葉は禁三は了解しないのだが、列車へ案内して呉れさうに見へないから、自分の言葉が先方に通じないのだと知つて、この上は乗車券を係員に示すがよからうと、禁三はポケットから乗車券を出して、係員のものに示して。

禁三「何所？〳〵」

と叫んだ、その効は直に理はれて、係員は禁三と作平を東方行の列車へ連れ込んで呉れた。

禁三「有難う〳〵」

と禁三は列車に乗込んだので、係員に謝辭を云つて後、作平に向ひ

禁三「作平、この列車へ乗込めば、これで一安心するが可い。それはさうと作平、この客車は廣くて立派なものだらう。」

作平「立派なものでお座りまする。」

樂三「この客車も立派だが、渡しの汽船も立派なものだつたらう。

作平「さやうで御座りまする、

樂三「あんな渡船に乘るにつけ、僕は如何して日本も彼れ位の渡船があつて欲しいと思ふのだ。我國の首府たる東京の渡船は如何だ兩國の渡船も、須田堤立つゝ呼べとこの雪に、誰も竹屋の音沙汰もなしと、古人に詠じられて有名な竹屋の渡船も、見るに耐へない舊式の舟だ、彼な舟は恐れ多いとだが、神武天皇陛下が筑紫から上らせたまふた頃の遺物で、二十世紀のものでないよ。

作平「成程、さやうで御座りまするでかな御座りませう。

樂三「かな御座りませうではない、確にそれだ。

作平「では、それで御座ります。

樂三「ではの二字は有難くないね。

二人は切りに會話をして居ると、間もなく列車は進行をはじめ、五

六分後には一瀉千里の勢で走り、電柱も家屋も二人の眼を眩ましうとするかのやうであつた。

北米合衆國の鐵道は、同國の面積三百二萬四千八百八十方哩へ、縱横に線路を布設してあるのだから、線路の延長は二十八萬哩以上である。而してその線路は幾多の私設鐵道會社の所有に屬して居つて、一哩の線路だつて政府の所屬のものはないのだ。從つて各鐵道會社は線路に仍つて、各々競爭をして居るから、時期に仍ると桑港から紐約市までの、普通乘車賃金は七十五弗であるを、三十弗位で乘車券を購買ふことが出來得ることがある。禁三が桑港へ著いた際は、東方行きの賃金は、競爭のため普通より五割も割引して居つた、その割引賃金の乘車券を、三谷は禁三に九十三弗に賣つけたのだ、然し禁三はそんな事情は夢にだも知らないものだから、三谷が禁三自身の地位に尊敬を表し、無報酬で盡力して呉れたものだと思つて居つた。

さて襟三作平が乗込んだ列車の線路は、サンタ、フイ鐵道會社に屬したものであつて、この線路はオークランドから、サクラメントだのフレシノだのを經て、ローサンゼルス市に出で、それからアリゾナ洲、ニューメキシコ洲、アールカンサス洲、ミゾリイ洲等を横斷して、市俄古市へ落き更に他の鐵道會社の線路に仍つて、紐約市に達するのだが、その線路中のアリゾナだの、ニューメキシコだのは渺々たる海洋の如く、乘客の眼に映ずるものは、光線の强い大陽に照らされた茫渺たる白砂ばかりで無味乾燥な線路だ、或るものは、亞非利加の鐵道よりもアリゾナ線の方が趣味に乏しいと云つた。

襟三『作平、この列車の速力と云つたら、大變なものだらう。

作平『さやうで御座りまするで御座りまする。

襟三『お前はこれ位の速力の列車に乘つても、吃驚して居るだらう。

作平『居るだらうでは御座りません、吃驚の上を通過して、何と申して可いか了解ませんで御座りまする。

襟三『さうだらう。ところで私が觀察するところに仍ると、この列車は一時間約六十哩位の以上を出ない。

作平『一時間に六十哩で御座りまするか。

襟三『さやうさ。

作平『迅早いもので御座りまするな。

襟三『さうさ、日本の汽車と比較すれば迅速ものさ、然し西洋ではそれ位の速力では決して迅速とは云はないのだ。西洋で速力の早い列車は郵便車で一時間に、九十哩位走るよ。

作平『一時間に九十哩！それでは天狗さまも跣足で御座りまするで御座りませう。

襟三『天狗！

作平『ハイ天狗！

と作平は高聲に叫んだ、その聲に客車内の乘客は驚かされて、作平の顏面を申合せたかのやうに眺めた。中にもウツラ〳〵と華胥の夢路を辿つて居つたものは、吃驚してガバと直立て、附近をキヨロリと見るもあつた。由來歐米の文明國では、高聲を放つたり叫聲を出だすを、下等として居るのだから、可成的低聲で話談をする習慣になつて居る。それだのに作平が大聲で「天狗」と叫んだのだから、乘客の多數が驚いた筈である。然し作平はそんなことは、勿論熟知て居らないのだから、平然と搏へ言葉をつゞけた。

作平『そのやうに走りますとは、麒麟も出來ませぬとで御座りまする で、如何しても天狗さまの外に御座りません、ハイ天狗さまの外は御座りませんと、この作平は思ひまするで御座りまする。

襟三『天狗々々と、そんな馬鹿なものがあるものか、沒條理とを云ふものでない。

作平『天狗さまが御座りませんと、且那さまは仰せ遊ばしまするので御座りまするか、天狗さまがないなぞと、勿體ないことを仰せ遊ばしましては、天狗さまが御立腹遊ばしまするで御座りまする。

襟三『ありもしない天狗が立腹するものか、若し天狗が出て來れば、僕が鼻の高さの比較技をしてやるよ。

襟三と天狗の鼻の高さ比較とは頗る妙案である、襟三の自慢の鼻の高さは、確に鞍馬の付丈坊以上だらう。

二人の談話聲は益々高くなつて、乘客は各々面見會はせ不興氣に見へた、されと二人はそれと心づかねば、調子は愈々高くなるばかりである、乘客は二人が無遠慮の高調子に、申合はされと不快を感じ何人が發議なしたるか、同車の乘客一同より『同車の二名の支那人は我々白人種の乘客に、不快を與ふるものなれば、車外に退去せしめられたし』と車掌へ申出た。車掌はそれを聞て温厚からぬ言葉だ

と、思はないでもなかつたが、車掌は襟三作平に注目して見ると、如何にも二人の會話の騒々しさと云へば、喧嘩としか思はれない位であるから、車掌は襟三作平の座席に近づき。

車掌「車内の御乘客御一同が、騒々しくて不愉快を感ずるから、何か貴方等のお談話を低聲に願ひたいと、申し居られますから御承諾を願ひます。

と車掌は丁寧に襟三作平に向ひ注意をした、襟三は車掌の言葉を充分に了解なし得ないから、車掌の言葉を多分乘車券を改めに來たのだらうと、推測して。ポケットより乘車券二葉取出して、車掌に示しつ英米人が了解なし兼ぬる、日本的英語で、

襟三「我々は斯の如く立派に乘車券を携帶して居るのです、それ、これを御覽なさい。

と車掌の目前に乘車券を突つけて、日本紳士の威厳を示すは斯かる

場合にありと、云はんばかりに傲然と構へ、例のチョロ髭を捻つた。車掌は襟三の言葉の意味を了解しないが、襟三が乘車券を目前に突つけ傲慢な態度を示すのを見て、我々は斯の如く乘車券を所持する立派な乘客なれば汝の命令を聞くの義務なしと、云ふのであらうと誤解し、車掌は憮然と怒り。

車掌「貴方等は如何にも乘客であるとは、私も認めて居るですが、それと共に私は自分の職權を以つて、貴方等の如き騒々しい乘客をこの客車にお乘せ申して置きまするを立派に謝絶致しますから、この次の停車場で下車して下さい。

厳然と云つて二人の座席を離れ、他の客車へ移つた、乘客は車掌の言葉を聞いて、一秒時間も早く次の停車場に列車が著けかしと思つた、襟三作平は勿論車掌の言葉を了解しないから、次の停車場へ著けば退車を命じられるとは、夢にも知らないで、襟三は車掌が退去

つたのを見て、推測した如く、乘車券を改めに來たものだと思つて海外旅行には語學より推測術の方が必要だと思つた。作平は何が何だか了解ないが、車掌が何だか嚴然と云つた態度なり、奮然と退去つた動作が、如何も尋常でないやうだと思ひ、何か面倒な事件が起らなければ可いがと、内々心配をして居つた。

乘客が如何なる思案を抱いて居らうが、列車はそんなことに關係なくドシ〳〵と進行して次の停車場に著いた。襟三作平は車窓から停車場の光景を眺め。

襟三『作平、この停車場は新橋の停車場なぞより、餘程劣つたものだね、一見歐米の停車場とは思はれないよ。

作平『實にさやうで御座りまする、然しこれが昔時から申します、京に田舍ありで御座りまするで御座りませう。

二人は餘念なく光景を眺めつ、談話をして居ると、以前の車掌は二

人に近づき。

車掌『停車場へ著きましたから、さ御下車下さい。

と頗る嚴格に云つた、だが襟三には例の如くその意味が了解ないから、例の安全法を取つて。

襟三『イエス。

と答へ平然として、捲烟草を吹かし氣取つて居つて、下車しやうとしない、車掌は二人の態度を見て、自分の命令に服從しないものと思ひ、

車掌『貴方等は私の命令を御服從下さらないのですか。

襟三『イエス。

車掌『イエスと仰せになつたのなら、發車に時間が御座いませんから早く御下車下さい。

襟三『イエス。

と云つて襟三は愈々平氣なもの。車掌は襟三の態度を見て、氣を焦燥て給仕を呼寄せ。

車掌「このお荷物をお下し申せ。

と給仕に命じたる上、二人に向ひ。

車掌「さ、御下車なさい。

襟三「イエス。

車掌は愈々焦燥て。

車掌「御下車なさい早く。

襟三「イエス。

車掌はこの上は強いて二人を下車せしめる外なしと、二人の手を曳き「下車なさい」と叫んだ。襟三は車掌が強いて下車せしめやうとするのを見て、さては線路の都合で他の列車に乗換へるのだらうと、推測して作平と共に下車をすると、列車は襟三作平と手廻り荷物を

二三個選して、東方に向つて發車した。

襟三作平が下車させられた停車場は、カリホルニヤ洲の首府のサクラメントといふ土地であつた。首府と云へば大層立派なやうであるが、由來合衆國では中央政府のある、ワシントン首府を除けば、日本のやうに首府は立派でない、紐育も市俄古も費拉泥爾比亞も桑港も首府でない、さて二人は停車場へ下車させられて、ツクネンと手廻り荷物の傍に立つて居つたが、何人も他の列車へ案内しやうとして呉れないので、襟三は勿論作平の心細さと云つたら、夢に枯れ野を走せて居るやうなものだ。

襟三「作平。これは全體如何したのだらう。

心細くなつて來ては、襟三もナカ〳〵氣取つて居るところでない、自から弱い音を立て作平に云つた。

作平「私は旦那さまと遊つて、ペラ〳〵といふ英語が出來ないので御

座りますると、旦那さまのお了解になるとさへ了解ないので御座りますれば、如何して了解ませうで御座りませう。

如何にも作平の云ふことは道理である、道理ではあるが、道理であるからと云つて、作平と何邪だに了解しないものと除外して、相談をしない譯には行かない、それでは襟三の心細さは一層高まるばかりである、人間の多數は金策に窮したときは、乞食者にだに相談をして見たいやうな氣を起さないものでない、襟三の即今の境遇は丁度それに似て居る。

襟三『それは勿論さうだ、お前は語學の出來ないものである——が作平、醫學博士だからと云つて必らず生命を助け、數學者だからと云つて、必らず生命を奪ふものでない、數にも効能といふことがあるから、お前も如何したら可いか、熟考して見て呉れ、私もそれ〳〵熟考して見るから。

作平『それでは、作平も一生懸命に熟考して見るで御座りませう。二人は手荷物に腰をかけて、切りに熟考て居ると、停車場の驛夫は二人を見て、二人は日本の勞働者と誤認し、二人にツカ〳〵と近づいて。

驛夫『オイ日本人、お前等は其所に何をして居るのだ、こゝは日本人がマゴ〳〵して居るところでないぞ、早く停車場を出て果樹園へ行つて、果實でも採取て貰金を貰ひ、米をムシヤリ〳〵と喰ふが可い、早く行け〳〵、早く〳〵。

二人には驛夫の言葉は了解ないが、驛夫の語氣に仍ると確に二人を罵詈して居るらしいと、襟三は推測してカツと怒り。

襟三『何だ、無禮な日本の紳士たる僕に向つて、即今の句調なり語氣は何たることだ。

と日本語で叫んで、驛夫をグツト睨んだ。作平は襟三の立腹を見て

作平「旦那さま、さう御立腹遊ばしてはなりません、今こゝで御立腹遊ばしまして、萬一騷動でも起りましては大變で御座りますれば、先づお心をお沈靜下されたう御座りまする。」

と禁三を宥めた。驛夫は禁三の態度を見て「何に生意氣な日本奴」と、彼は平素から日本の勞働者を、下等動物を扱ふかの如く待遇つて居る惡習を出し。

驛夫「小さな日本奴、お前は助倍が好きだらう、助倍々々」

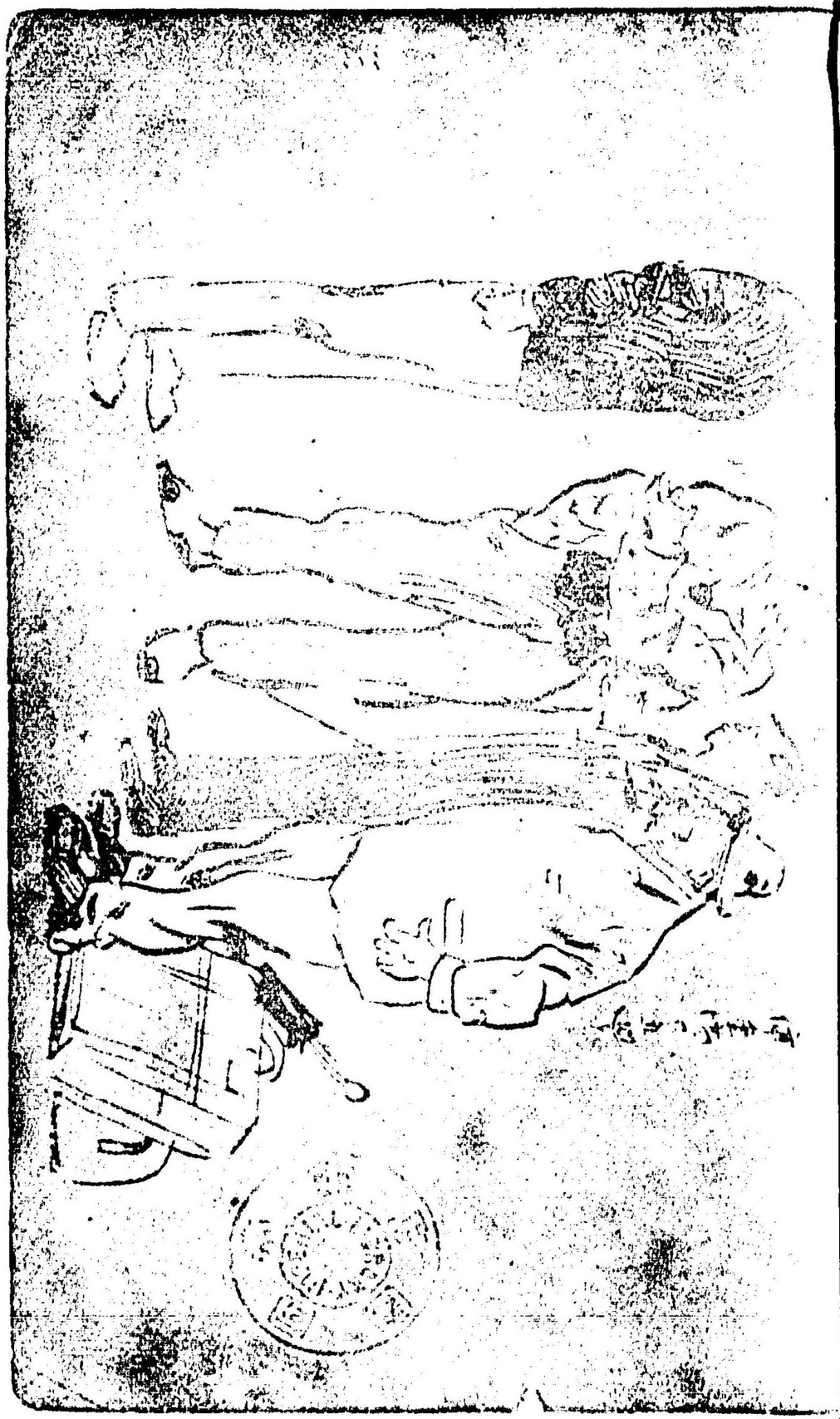
驛夫の惡弄は益々烈しく、果ては右手の拇指を鼻の先につけ、四本の指を動かした、その意味は西洋に於て最も人を卑め、惡弄する方法である、禁三はそのことを察して聞知て居つたから、怒心頭より發し携帶の洋杖を以つて「無禮な」と云ひつゝ、驛夫の頭上をイヤといふほど毆打た。

(十) 強いものには弱い

高井禁三が怒に乘じ、驛夫の頭上に洋杖を見舞つたゝめ、日本奴が白色人種を毆打たといふ噂は、渋水の激浪が堤防を破壞して奔溢するかのやうに、停車場の外へ溢れ出た。

サクラメント附近は、カリホルニヤ洲でも桑港に劣らない位、排日の氣勢が高いところであるから、その噂がパット立つと、「惡い日本奴だ私刑をせい」と、叫ぶものも少なくなかつた。

驛夫は禁三に毆打れたが、禁三の氣勢が頗る高いので、この上惡罵々々云はうものなら、何な亂暴をせられるかも知れないと、思つたと見へ再び禁三に向つて、罵詈讒謗は勿論惡弄をだにしないで、初めの氣勢何所やら失せて、消氣て禁三の顏面を眺めて居つたが、停



車場へ集まりし野次馬連が『白色人種を殴打やうな、日本奴は私刑にして仕舞へ』と叫んだので、驛夫は再び氣勢つき。

驛夫。コラ日本奴！ウヌ……

榛三は『私刑』と野次馬が叫んだ譯は知らないが、何にしろガヤガヤ野次馬が騒ぐのに、これは飛んだことになつたと消氣て、如何したなれば可いかと心を痛めて居ると、そこへ一人の日本人が來た。その日本人の服裝はカラをかけないで、一見破戸漢らしい男子であるが、彼は榛三に向ひ。

破戸漢『僕は林といふものですが、即今停車場の前を通りかゝりますと日本奴を私刑にせいと、紅毛人が怒鳴つて居りますから、鶴棒めも日本人を私刑なんかにさして、おたまりこぼしがあるものかと、飛込んでまゐつたのですが、一體貴方は如何なすつたのですい？

車場へ集まりし野次馬連が「白色人種を殴打やうな、日本奴はお前にして仕舞へ」と叫んだので、驛夫は再び氣勢つき。

驛夫。コラ日本奴！ウヌ……

樣三は「私刑」と野次馬が叫んだ事は知らないが、何にしろガヤガヤ野次馬が騒ぐのに、これは飛んだことになつたと消氣て、如何したなれば可いかと心を痛めて居ると、そこへ一人の日本人が來た。その日本人の服裝はカラをかけないで、一見破戸漢らしい男で居るが、彼は樣三に向ひ。

樣三。汝は林といふものですが、即今停車場の前を通りかゝる日本奴を私刑にせいと、紅毛人が怒鳴つて居ますが、お前は日本人を私刑なんかにさんで、おとなしく居りなさいと、飛込んでまゐつたのですが、一體貴方は如何なすつたのですか？

襟三は聲をかけられて、三途の川畔で亡者が阿彌陀佛に會つたほどに喜び。林に最初からの委細を語つた。

林「さうです、そりや貴方が手をお出しなさつたが可くありません然しそんなに馬鹿にされりや、何人だつて頭上の一つや二つ殴打るものです。

襟三は林の同情を得て喜んだ、咽喉が涸渇たとき、甘露のやうな清水を汲んで貰つて、飲んだかのやうに。

林「貴方だから洋杖で、一寸殴打なさつた位ですが、僕だつたら確に半殺しにして居まさア、御承知で居らつしやるか、居らつしやらないか存じませんが、米國では鼻の先へ拇指をつけて、四本の指を動かして馬鹿にしたときは、殴打ても差支ないんです僕が始末をつけてあげますから、安心して見物して居らつしやい。

と林は云つて、驛夫に近づき。

林『オイ、ヂミ（驛夫の名）この紳士は、僕の親友だのに手前は何故恐弄にした。

驛夫『親方、何も相濟みません。

林『さう謝罪なら宥恕してやらア、その代はりこれから、日本人を恐弄にしたら承知しねへぞ。

襟三に強かつた驛夫は、林に對しては蛇に睨まれた、小さな蛙のやうに弱くて、その意氣地なさは笑止のやうだ、それはその道理だらう、サクラメントで『林』と云へば米國人の破戸漢でさへ、裏家の狗が闘犬に『ウー』と聲をかけられたやうに、縮みあがつて仕舞うほど、恐怖られて居るのだもの。

林『御覽て居らつしやる通り、驛夫は謝罪つて居りますから、貴方さへ宥恕しておやりなさいますなら、それで終局がつくのです。

襟三『私は宥恕すも宥恕さないもありません、貴方のお心次第で如何樣とも……。

林『さうですか、ぢや宥恕しておやりなさい。

と襟三に云つて、驛夫の方に向ひ。

林『宥恕してやると云つて居らつしやるから、有難くお禮を申しねえ。

驛夫『ヘイ、有難う御座います。

林が現出れたゝめ、炭火に水を掛けたやうに紛擾は消へて仕舞つた。

そこで襟三は惹んで林に謝辭を述べ。

襟三『御盡力の段有難う御座いました、就いては謝意を表するため粗飯を差上げたいですが、何所へかの料理店へ、御同行願たいものですが、御都合は如何でせうか。

林『何に、これぱかしのことに、お禮も何も要るものぢやありません。

最前からこの結局は如何になるやらんと、心配をして居つた作平は、無事に終局がついたので、ヤレ〳〵と安心して口を出し。

作平『旦那さまも、申して居られまする。とで御座りますれば、是非何家へかお同行下されたう御座りまするで御座ります?。

林『そんな御心配はお止しなさい。

襟三『決して御馳走を申すといふほどのとで御座いませんから、是非同行して下さい。

林『ぢや御馳走にあづかりませう。

襟三 直ぐ參りませう。

と林に云つて、作平に向ひ。

襟三『作平。お前は茲所で荷物の張番をしてお居で。

作平『ヘイ。

襟三『ぢや、參りませう。

襟三は林と共に停車場を出たが、襟三は勝手切つて、はじめて東京へ上つた田舍者同樣で、サクラメントの案内を少しも知らないのだから、停車場を出るは出たが、料理店が何所にあるやら、少しも了解ないので、林を連れて闇雲に歩行た。林は襟三が自分を何處へ連れて行くのか、少しも要領を得ないものだから不思議に思ひながら七八町も同行したが、襟三が何處へも入らうとしないで、マゴ〳〵して居るのを見て。

林 貴方は何處へ行らつしやる、御目的ですか?

襟三『僕ですか、僕は……

と云つた限り早速に次の言葉が出ない、それは後の言葉が連續かぬ道理だ、襟三は土地不案内のとだから、高等な料理店が東方にあるやら、西方にあるやら了解ないのだもの。と云つて何時までも林を連れて、サクラメントの市街をブラ〳〵と歩行ても居られないは、

勿論のとだから、襟三は身分の體裁の悪さを我慢して。

襟三「林さん、先刻もお話し申した通り、僕は先刻この停車場へ下車されたばかりですから、何所に高等な料理店があるか、少しも知らないんです、さりとて招待をする貴方に、料理店は何家が高等です、そこへ案内して下さいとも云へないので、實は即今まで一方ならず、苦心をして居つたのです。

林「オヤ、さうですか、そんなとなら早くさうと打明けて下さりや、僕が何家なと案内をするのですに、飛んだ御心配をかけましたね。

襟三「イヤハヤ何も……。

林「ぢや僕が案内致しやせう。

と林は先に立つて二町ばかり歩行て、トある料理店へ襟三を案内した。

（十一）日本人が居る

合衆國でカリホルニヤ洲は農産地で、我國の北海道といつたやうな風だ。そのカリホルニヤ洲のサクラメントだから、東京の帝國ホテルだ一の旅館さへない、從つて料理店もそれ相當のものしかない。

林が襟三を案内して入つた料理店は、宮殿料理店といふ名稱である宮殿と名づけたのだから、定めて立派な料理店だと思はれるが、事實は餘り有難くない料理店である。宮殿と云つたからといつて、必ずしも立派な建築に限つたものでない、屋敷と云つても化物が出るところもある世の中だもの。

襟三は林と料理店へ入つて、トある食卓について料理を注文して喰ひつゝ。

禮三『林さん、この料理店は當地で相當な家ですか。

林『さうです、中の上等といふ格ですよ。

禮三『さうですか、お氣にさへて下さつては否ませんが、この料理店が中の上等とすれば、東京の帝國ホテルなんかは、當地へ移したなれば、恐らく當地第一流の旅館で御座いませうよ、さう思ふと日本もナカ〳〵進歩したものでせう。

林『そんなに進歩したですかな。

禮三『進歩したよ。

林『ところで帝國ホテルへは何な方が、行らつしやるんですか。

禮三『我國の紳士紳商は勿論、外國人も來るよ。

林『紳士といへば、國會議員なぞも行くのでせうな。

禮三『勿論です、貴衆議員で帝國ホテルを知らないものはありますまい。

林『ところで、ホテルは日本料理も致しますかね。

禮三『日本料理は出さないよ。

林『はてね。

と云つて林は一寸頭を傾けて。

林『貴方は議員は帝國ホテルへ行くと、云はれましたが、議員の佐々さんなんかも行らつしやいましたか。

禮三『佐々君か！佐々君なんかは勿論行つたさ。

林『さうですか、はてね……。

と林は再び何か熟考に沈んだ、禮三は林の挙動を不思議さうに眺めて。

禮三『貴方は佐々君の御姓名をお聞きになつて、切に何か熟考て居られるやうだが、貴方は佐々君と御親類でゝもおありなさるのか。

林『イヤ、親類でありません、立派な他人ですが、不思議ですから熟考て居るのです。

禁三、不思議とは如何様なことですか？。

林『他のことやありませんが、佐々さんが帝國ホテルへ行らつしやつたのなら、西洋料理の名稱位は了解て居らつしやるでせう。

禁三『そりや勿論了解して居るさ。

林『だから不思議なんです。佐々さんが西洋料理の名稱を了解て居らつしやるのに、何故失敗をやらかしたのですかな、奇妙ですね全く妙だ。

と獨語のやうにいふ。

禁三『佐々君の失敗とは何なことだ。

林『他ちやありませんが、佐々さんが洋行なさいましたとき、ホテルの食堂で荷荷を注文なさいました。

禁三『成程。

林『ところがその注文なさるに佐々さんは、給仕に『コレ給仕ホルトを持つて來い』と云はれたです。

禁三『成程。

林『ところが給仕はホルトが、何のことだか了解ないのでマゴ〳〵して居ましたので、佐々さんは立腹ました。

禁三『はてな、ホルト？……

林『貴方はホルトが何だかお了解になりますか。

と云はれて禁三は熟考したが不得要領だ。

禁三『何も難問題だな。

林『お了解にならないでせう。同じ日本人の貴方でさへ、お了解にならないんですもの、紅毛人の給仕が了解ないのは道理です、ですから佐々さんはホルトをおあがりなさらず仕舞でしたが、後で聞けば佐々さんの云はれるには、ホルトに荷荷のことだ、その理由は荷荷牙と書いてホルトガルだから、そのガル即ち牙を

取れば葡萄だらうと、云つたやうな隠語なんです。

鶴三『葡萄牙の牙を取ればホルトで、葡萄だとは成程……、先生巧く考へたねアハ、、、。

二人は語り且つ喰ひて、料理屋の戸外に出た。

林『貴方はこれから何所へ行らつしやいます？。

鶴三『私ですか、私はこれから停車場へ歸つて、従僕と共に列車に乗つて、紐約へ行きたいと思ひます。

林『紐約へ直行なさいますか？。

鶴三『イヤ、市俄古へ立寄つて二三日見物をしてまゐる豫定です。

林『市俄古だけしか御見物なさらないのですか？。

鶴三『さうです、桑港から紐約市までの中間で、觀覽すべき土地は市俄古位のものでせうから、その他に立寄らないつもりです。

林『さうでもありませんよ。市俄古の外にデンヴァもあれば、カンサス、シチーもあり、セント、ルイもありますア。

鶴三『然し大した都市でありますまい。

林『イヤ、さうでもありませんや。

鶴三『見るべき價値がありますか。

林『ありますよ、デンヴァの附近には、金鑛もあれば銀鑛もあつてお道化た姿の騾馬が峻嶺を上つて居ますし。カンサス、シチーに行けば素敵な羊小家があり。セント、ルイに行らつしやれば世界一の麦酒會社がありますア。その外に後へ逆戻りになりますが、ソートレーキ市へ行けば、五人でも六人でも女房を帶つて、差支がないといふ奇妙な宗教の、御本山があるさうです。それにソート、レーキには、日本鳥のお花お海なんかゝ居りますよ。

鶴三『日本鳥のお花とは、何種な鳥ですか。

と禁三は不思議さうな面色。

林『アハ、、その鳥ですかい、その鳥は一寸美くしい鳥で『チヨイと貴方や』なんと日本語を話ますのです。

禁三『では鸚鵡なのですね。

と云つて禁三は合點が行つたといふ面色。

林『鸚鵡！アハ、、鸚鵡とは面白いねアハ、、、。

と林は獨り笑つた。

禁三『では鸚鵡でないのですか？

林『鸚鵡ぢやありません、日本の女郎のとなんです。

禁三『ヘーン、女郎を米國では日本鳥といふのですか？。

林『さうです。

禁三『何故人間を鳥なぞといふのです。

林『それは斯ういふ理由です、米國に居る、日本の女郎に四種あり

まして、西洋人を客に取るのと、支那人を客に取るのと、何國のものでも客に取るのと、日本人を客に取るのとありますが、西洋人を客に取るのが、紅毛人取り、支那人を客に取るが支那取で、日本人を客に取るのが日本取りで、取りを鳥と洒落た譯でさア。

禁三『ヘーン奇妙な洒落ですな。

と云つて禁三は感心した。さりとは奇妙なことを感心したものかな。

二人は談話をしながら歩行て、停車場へ歸つて來た、待つて居つた作平は二人の姿を見て。

作平『ヤアお歸り遊ばしまして御座りまするな。私は又布哇で待つたやうに、一夜待たねばならぬかと心配して居りましたが、好くお歸り下さりまして、有難う御座りまする。

作平は禁三が歸つて來たを、亞人となつて戰地へ行つた息子が凱旋

したかのやうに喜んで、襟三を迎へた。襟三は作平の喜び迎ふるを、さのみ嬉しとも思はない面色で見返りもせず、林に向ひ。

襟三『林さん。貴方は御面倒でせうが、この次の列車は東方へ何時に發車致しますか、お聞き下さいませんか、私はその列車で市俄古へまゐりたいと思つて居ります。

林『お容易とです。

林は驛長室へ行つて、發車の時間を問合せて襟三に近づき。

林『五分後に列車が參りますと、いふとですからそれに乘車なさつては如何です。

襟三『では、その列車に乘ることに致しませう。

二人は尙ほ何かと談話をして居ると、間もなく東方行きの列車が著いた。

林『彼の列車が東方行きの列車です。

襟三『さうですか、では作平彼の列車に乘らう、と襟三は林と共に列車に進んだ、作平は荷物を切々と列車に運び、襟三作平は客車に乘込むと、列車は徐々と運轉をはじめた、襟三は車窓を明けて。

襟三『では、林さん失禮致します。

林『左樣なら。

と云つて帽子を振つたが、速力の早い列車のことて、二分とも經過ない内に林の姿は見へなくなり、五分後にはサクラメントの停車場も影だに見へなくなつた。

列車の走るにつれフレシノも過ぎ。乘客は列車給仕が開いて見れた寢床に入つたが襟三作平もその内の一人であるが、二人は定めし夢に故山に遊ぶことであらう。

襟三作平は翌朝眼を覺まして、車窓から外の景色を眺めると、視線

の遠する限り茫渺たる砂地で、稀に小さな家屋を二三見る位であつた。

作平『旦那さま、こゝは何所で御座りまする、廣い砂地で殆で砂の海のやうで御座りますが、これが砂漠とかいふので御座りまするで御座りませうか。

禁三『砂漠ではないが、マ、小さな砂漠といつたやうなものだから、多分アリゾナ洲だらうよ。

禁三の推測は略的中て居らうか？、こゝはアリゾナ洲でなくアリゾナ洲に近いカリホルニヤ洲の東南方である。

二人は寢床を離れ、給仕に案内されて洗面所に入り、顏面を洗つて出て來ると、寢床は畳まれて以前の腰掛になつて居つた。それで二人は烟草を吹しながら食堂車へ行き『こゝで喫烟してはなりません』と云はれても、その言葉が了解ないため、平氣で烟草を吹して居つ

たゝめ、食堂給仕は立腹して、二人が口に咬へて居る捲烟草を取つて捨てた。禁三はムツト癇にさへたが、停車場での失敗を想起してそのまゝ我慢をして食事をコツ〳〵と濟して、作平と共に以前の客車へ歸つた。

列車は急行列車であるから、小停車場へは停車しないで、ドシ〳〵と進行して、その日の正午はアリゾナ洲に入つた。

アリゾナ洲は鑛山の多いところであつて、土地の大部分は砂地で、小砂漠のやうな個所が多く、鐵道線路に面した土地でさへ、停車場を除けば人家は稀にしかなく、各十哩か十四五哩毎に、小さな小屋が一二戸あつて、それは工夫が寢食をするとになつて居る。禁三作平は珍らしさうに、時々眼に入る工夫の小屋を眺めて居つたが、突然高聲をあげて。

作平『旦那さま、日本人が居ります。

と叫んだ。

（十二）西洋の強盗は卑怯

作平が例の高聲をあげて叫んだので、客車に居る乘客は攜いて視線を作平に向けた。禁三は『日本人が居る』と聞いたので『何れ何所に？』と車窓から車外の景色を眺ると、作平が云ふた如く、日本人が十人ばかり、汚れた勞働服を纏ふて、鶴觜や大きな鐵槌を携つて、線路の片側に立つて列車を眺めて居つた。

禁三『日本人だね。

作平『さやうで御座りますが、彼の人等は何を致して居るので御座りませう。

禁三『彼等か、彼等は我國の移民なるものさ。

作平『移民と申しますと、矢張新平民のやうなもので御座りますか。

禁三『馬鹿なことをいふものでない、移民は國力の發展に連れ超つて來るもので、決して新平民に比すべきものでない。

作平『では御座りまするが、新聞では米國が日本の移民を輕蔑して居ると書いて御座りまして御座りまする、そし故私は新平民か何かのやうなものぢやと思ふて居りまして御座りまする。

禁三『輕蔑せられるからといつて、必らずしも下等なものと限つては居らない、基督は猶太人に卑められたこともあるのだ。

作平『さやうで御座りまするか。

列車はアリゾナ洲へ入つてから、速力は益々迅速になつて、電柱の數をだに算へ得られぬほどであつたが如何したものか列車は突然停止つた乘客は列車が停止したので、さては何所かの停車場であらうと車窓の硝子越しに附近の景色を眺めたが、附近には一戸の家屋さ

へなき砂地で、何といふ學名の植物か知らないが、熱帶地方の景色を描寫した、西洋の油畫にマ、見受ける、刺の多い草が少々生へて居るのみである。それでは停車場ではない、停車場でない個所で突然停車したのは、何事だらう？例の列車強盜が列車を停止せしめたのだ、サア凶事だ大變だと乘客は、面色など蒼白して中には今にも生命を絶たれるかのやうに、戰々兢々として人心持のないものさへあつた。襟三作平は米國に於る列車強盜が恐怖しいものであるとを少しも承知して居らないのだから、平然たるもので、

襟三「作平、何故こんな個所に停車したのだらう？一寸奇妙だ、奇妙と云へば奇妙は米國人の生命だ、米國人は奇と黄金のために、生息て居る國民だ、彼等から奇と黄金を奪ひ去つたなれば、彼等は現社會を愛き世といふだらうよ。

作平「奇とかいふものと、黄金はそのやうに貴重ものでご座りまするか。

襟三「米國人には最も貴重なものだ。

作平「それ故、西洋の時計だの指輪だの、鎖だのを買捌きまする商館を、日本では奇金屋商と申しまするのでご座りませうか？

襟三「貴金屋と奇金族、なるほどこの地口は頗る妙だ、然もその地口が作平爺の口から出たのだから、尚更奇妙と云はなければならないて、アハ、、、。

作平「妙でご座りまするか、私も妙と存じて居りまするでご座りまする。

襟三「夫子自から妙と思つて居るは、頗る振つた妙だ、アハ、、、

作平「それで旦那さま、日本には昔時時計だの、指輪だの鎖だのばかりを商賣まする、商人は御座りませんで御座りましたに、近頃は兩後の聖子のやうに奇金族屋が、ピコリ〳〵と數が殖へてまか？。

ぬりましたは、矢張米國風が日本へ移つて來たので御座りませうな、さりとは情ないとで御座りまする。

作平は何と感づゝたか、慨歎に堪へないといつたやうな風だ。禁三は作平に關はないで例の如く氣取つて、葉捲烟草をプカリ〳〵と吹して居ると、列車内は何か騒動が起つたと見へ、急にザワ〳〵として來た。

禁三『作平、變な、樣子だが何事が起つたのだらう？

作平『何事が起りましても、安心して御座りませ、この作平爺が附いて居りまする。

作平は荒れに荒れた巨牛を取鎭めた、小文吾位はこの爺の面前へ出れば雛鳥のやうなものだと、いはんばかりに云つた。

列車内はイヤが上に騒々しくなつて『強盜が列車の運轉を停止たのだ』とか『乘客の一人は強盜に抵抗して銃殺された』といふ聲が立

つて、乘客は顏色なく、冷水を頭上から浴せられたかのやうに、鎭まつて一言だに出すものがなくなつた。禁三作平は言葉が通じないため、そんな噂を耳にしないから、頗る平然たるものであつたが、それはホンの瞬時で、列車強盜が十名ばかり、手に〳〵拳銃だの鐵砲だの、明光々たる鋭刄を携へて、禁三等が乘つて居る客車内へ、ドヤ〳〵と入つて來て乘客に『兩手を擧げろ』と大聲で命令を下した。西洋の強盜は日本だの支那の强盜と違つて、最初に『兩手を擧ろ』といつて兩手を高く擧げしめるのである、それは何故かといふと西洋人は旅行するとき大底護身用としてポケットに拳銃を携帶して居るから、兩手を擧げさせないと、ポケットから拳銃を出してズドンと一發放つて、反對に銃殺される怖れがあるから、拳銃に手をかけさせないために、双手を擧げさせるのだが、强盜といふ仕事はナカ〳〵呑氣でない仕事だ。乘客は强盜の命令に抵抗するもの一人

もなく、恰かも學校の生徒が體操をするかのやうに、双手を擧げて眼ばかりパチクリさせて居つて、人間らしい顏色のものは一人もなかつた。

襟三作平は言語が通じないとはいへ、手に〳〵兇器を携帶して紙假面で面部かくした、人物が十人ばかりドヤ〳〵と入つて來たのを見て、これは平常邪でないと察した。さう察して見ると西洋人が怖れる如く、彼等が手に〳〵携帶して居る、兇器は襟三作平に不安の念を起さしめた。

強盜は乘客が双手を擧げて居るに關はらず、襟三作平が双手を擧げないのを見て。

『そこに居る外國人、二人とも双手を擧けろ。』

と叫んだ。然し二人は何の意味だか了解ないから、マゴ〳〵して居つた。

『外國人、双手を擧けろ。』

強盜は再び『双手を擧げろ』の命令を發したが、襟三作平の二人はマゴ〳〵して居るのみであつた。

『彼奴等は英語が了解ないのだらうか。

強盜二 何もさうらしいね。

強盜三 英語が了解なけりや、仕方がないから殺害て仕舞うか。

強盜一 それは可哀相だから、抵抗さへしなければ、受取るものだけ取つて恕してやらう。

強盜は相談を一決して、乘客を一人々々強迫し、携帶の金員貴金屬寶石類を强奪した、襟三と作平は英語が通じないのだから、詳細に了解ないが、強盜が兇器を携帶して入つて來たので、強盜であることを推測し得ぬでもなかつたが、彼等強盜が乘客を强迫したのを目擊て、愈々強盜に相違ないことを認

めた。サアさうなつて來ると、襟三は人一倍恐怖心の強い性質だから、生息て居る心持しないで、作平が居らないとであつたなら、太神宮さまでも道了さまでも金神さまでも天輪王さまへでも、災難を助けたまへと聲を揚げて、祈願たいと思つた。作平は襟三ほど臆病ではないが、さりとて矢張普通の人間だから、強盜に遭遇たのだもの、決して好い心持はしないで『南無、天輪王の尊、助けたまへ、天輪王の尊』を繰返して唱へた。強盜は作平が『天輪王の尊』と唱へて居るを聞いて、何と感じたらう？彼等の頭腦には恐らくその解釋が決定なかつたらう。

強盜は襟三作平に近附て、拳銃を二人に向け『ポケットを改めるぞ』と云つて二人のポケットを改め、襟三の金側時計と附屬の金鎖と、所持の正貨を奪ひ、その内から五弗ばかり銀貨を出して、襟三に返し、作平の所持品は一物一錢をも取らないで、スーと去つた。

強盜が立ち去つて五分間ばかりも經過すると、列車に再び徐々と進行しはじめた。多數の乘客は列車が進行しはじめたので、ホット一氣息ついた。襟三も列車が進行しはじめたので、車窓から頭を出して、何の氣なしに附近を眺めると、乘客を强迫した强盜等は紙假面を脱し、列車の進行を眺めて冷やかな笑を顏面に浮べて居つたが、その内の一人は襟三が車窓から自分等を眺めて居るのを見て面相を知られては後難の憂ありとでも思つたものであらうか、手に携帶て居る鐵砲の筒先を襟三に向け、一發ヅドンと放つた。襟三はそれに驚いて、慌忙て頭を車窓から入れんとして、車窓の框でイヤといふほど頭を打つけて。

襟三、呑々。

と呻いたまゝ氣絶した。作平の吃驚は勿論だが、乘客は一發の銃聲を聞くと、殆んど同時に襟三が呑と叫んで卒倒たのだから、これは

必定強盗に射撃しられたものと思つた。

作平「大變だ〳〵、旦那さまがお卒倒なされた。

と叫びながら襟三を抱き起し。

作平「旦那さま、お氣を確にお持ち下され、作平爺で御座りまするで御座りまする。

作平は我子を愛しむ如く襟三を介抱した。その効あつて襟三は氣息を吹きかへし、眼をパチクリさせて作平の面を眺め、夢のさめたかのやうに。

襟三「アヽ、吃驚した。作平、私の身體に銃瘡はありはしないか。

作平は襟三の身體を、近眼者が金錢勘定をするやうに、丁寧に改めつゝ、

作平「旦那さま、何所にも御座りませんやうで御座りまする。

襟三「ないか？、アヽそれを聞いて安心した。

と旅客が汽車の發車間際に、停車場へ馳せつけ都合よく乘車なし得て、ホット一氣息ついたかのやうに襟三は安心した。

襟三「のう作平。西洋は進歩して居るだけあつて、その國の盗賊まで進歩して居るね。

作平「さやうで御座りまするか。

襟三「進歩して居るよ、我國の盗賊は米國の盗賊のやうに、私の面を見るなりヅドンと一發機敏に鐵砲を放つやうなことを得しない。

作平「さやうで御座りませうかな。

襟三「さうだよ、こんな危險な目に會つて見ると、進歩といふものも餘り有難くないやうな氣にならぬでもない。

作平「さやうで御座りまするか。

襟三「さうだ。若し我國の盗賊が米國ほど進歩したなれば、それこそ大變だ。

作平「だが旦那さま、西洋の盗賊は卑怯で御座まするな、不意打なぞをするのは卑怯では御座りませんか、私が盗賊であるなれば、立派に名告つてかゝりまするで御座りまする。

糟三「さうか、われこそは東京――否な日本の二十世紀の紳士たる、高井楳三の従僕作平爺なり、所持品悉皆これへ出せ、若し出さゝるとなれば、常に勝負々々といふかね。

作平「旦那さま、それでは敵討になりまする。

糟三「アハ、、、それもさうだね。

作平「然し旦那さま、この國の盗賊は欲が強なう御座りまするな。

糟三「さうでもあるまい。

作平「イエさやうで御座りまする。

糟三「何故、寡慾だね？。

作平「と申しまする盗賊は、私の時計ちやの正貨を強奪ませんで御座

作平「だが旦那さま、西洋の盗賊は中世で御座まするな、不意打なぞをするのは卑怯では御座りませんか、私が盗賊であるなれば、立派に名告つてからりまするで御座りまする。

警三「さうか、われこそは東京――否な日本の二十世紀の紳士たる、高井警三の従僕作平君なり、所持品悉皆これへ出せ、若し出さいるとなれば、敢然に勝負々々といふかね。

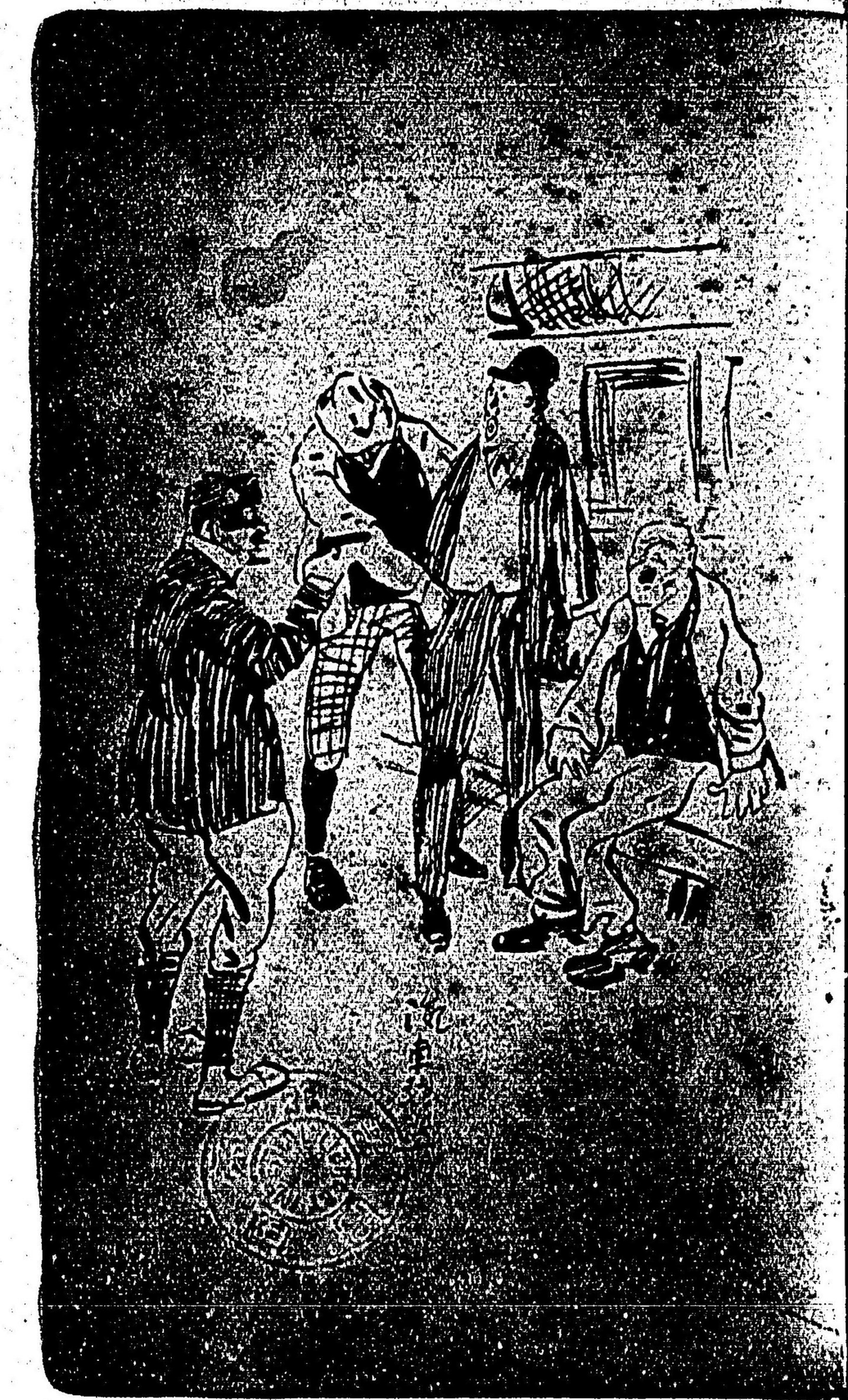
作平「旦那さま、それでは敵討になりまする。

警三「アハ、、、それもさうだね。

作平「然し旦那さま、この國の盗賊は慈悲深なう御座りまするな。

警三「さうでもあるまい。

作平「イエさやうで御座りまする。

警三「何故、寡慾だね？。

作平「と申しまする理由は、私の時計ちやの正直を要求ませんで御座